

やみ・あがりシアター第20回公演  
「フイクシヨナル香港IBM」

作…笠浦静花

このテキストの著作権、上演権はやみ・あがりシアターに帰属し、無断での上演や販売等を禁止します。

## 映画「フィクショナル香港 IBM」

本作品においては、同名の作中映画が登場する。

以下は映画「フィクショナル香港 IBM」の、用語集および登場人物の説明である。

### ○用語

時代設定は2088年である。

フィクショナル香港・・・1980年代の香港の街を再現した仮想空間。IBMが開発・管理している。人々は肉体にチューブをつなぎ、眠ったような状態でこの仮想空間にアクセスする。他社の仮想空間とは一線を画す、リアルな肉体感覚がウリだが、どんな痛みがあっても、死は実装されていないので、この空間で市民たちが死ぬことはない。

フレッシュ・・・フィクショナル香港の世界全体をリセットし、一定期間の市民の記憶を消し去って、特定の状態に戻すこと。

日陰・・・フィクショナル香港の、壁の中など、IBMの管理が行き届いていない部分。特定の動作をすることができるといわれる、いわゆる、ゲームの裏世界のような場所。

コデーネイトチェンジ・・・二者の中身を入れ替えること。限られたものにはしか権限がない行為である。

電子人形・・・いわゆるNPC。現実世界の人間がアクセスしているわけではなく、このフィクショナル香港にしか存在しないプログラムである。フィクショナル香港には複数の電子人形が紛れ込んでいるが、誰がそうであるか市民たちは知らない。

「第五番」・・・フィクショナル香港を、国家として独立させようとする革命組織。

八不打・・・「第五番」の大統領らを使うことのできる拳法の技。人間の8個のツボを押して、死に至らしめる。

### ○登場人物

I (アイ)・・・若手作家。このフィクショナル香港のルポルタージュを書くためにやってきた。実は電子人形。Uに恋をする。

U (ユー)・・・産業スパイとしてフィクショナル香港にやってきた。自分の任務の遂行により、街が壊れていくことに胸を痛める。

補佐官・・・IBMの社員で、フィクショナル香港の管理責任者。

ミヌエット・・・IBMのアルバイト社員。

ラグドール・・・IBMのアルバイト社員。電子人形である。

セキュリティ・・・フィクショナル香港の治安維持部隊の男。

娘 (リリー)・・・セキュリティの娘。電子人形である。

ヤマダ・・・日本国籍のテロリスト。フィクショナル香港に亡命中。

ライスボール・・・ヤマダにおにぎりを持つてくる係の女性。

マスター・・・飲み屋「ブルーハウス」のマスター。女好き。

占い師・・・「ブルーハウス」の常連。占いで未来は見ない主義。電子人形である。

《未来の》大統領・・・革命組織「第5番」のリーダー。かつて、フィクショナル香港から永久追放をくらっており、街の軀体に触れたとたん強制送還となる。  
パン・イ・セボジャ・・・「第5番」の武力担当。  
キー・ヴィヴラ・ヴェドラ・・・「第5番」の鉄砲玉。

●映画外の登場人物

男 女

★出演者

出演者は16人。出演者名は2024年5月の初演に準拠する。  
主に、コーディネイトチェンジの都合上、中身が入れ替わって複数の役を演じることがあるため、

出演者・・・役柄

と表記してここに整理する。

それぞれ、一番最初に表記される役柄がメインの役柄である。

奥山樹生・・・I／補佐官／セキュリティ／パン／ライスボール  
梶川七海・・・U

小林義典・・・補佐官／I／男6／男12

サニー・・・ミスエット／女D／I／マスター／女1／女7

湯浅くらら・・・ラグドール／女C／女2／女10

加瀬澤拓未・・・セキュリティ／I／男C／男2／男9／男14

富岡英香・・・娘／女A／女4／女9／女13

二宮正晃・・・ヤマダ／知らない人①／I／男5／男11

小嶋直子・・・ライスボール／通行人／I／女6／女11

佐々木タケシ・・・マスター／店員／男D／I／男1／男8／男13

波世側まる・・・占い師／知らない人②／女5／女8／女14

さんなぎ・・・《未来の》大統領／女B／女3／女12

笹井雄吾・・・パン／ミスエット／I／男B／ヴェドラ／男3／男7

三枝佑・・・ヴェドラ／男A／I／男4／男10

加藤睦望・・・女

森田亘・・・男

【あらすじ】

1980年代の、サイバーパンク映画「フィクションナル香港IBM」を観てハマった男女が、その後、何度も何度も同じ映画を見続ける。結婚し、不妊治療をし、猫を飼い、それが死ぬなどして人生は続く。

2024年、とくに守るものやこれからの目標もない二人は、あの「フィクションナル香港IBM」のように、自分たちだけの仮想空間を作ろうと決意し、そのことに残りの一生を捧げる。

よりよい未来、もしだった人生を求め、もしも二人があの時別れていたら？という想定を何種類も考えるものの、結局のところ、出会ってからいままでの、そのままの人生をもう一度仮想空間で体験しなおすことにする。

2058年、ついに二人はいままでの記憶をすべて消し、肉体を捨てて、仮想空間にはいつていく。2088年に脳の寿命が尽きるまで、二人は仮想空間で自分たちの人生を繰り返し、人生のなかでまた映画を観ているだろう。

また、この作品全体の上演時間目安は2時間である。

開演前。

喫茶店のような場所であるが、その質感、明かりなどはやや異様で、どこかサイバーパンクな、SFの雰囲気を感じさせる。

テーブルがいくつつか。椅子もいくつつかあり、真ん中のテーブルに、コーヒークップがひとつ。このコーヒークップは、作中において、最初から最後までずっとそのテーブルの上にある。

背後には色とりどりのパネルが立っており、ちょうどスタンドグラスのように光が透ける。

アクトスペースの外、上手と下手に「フィクションナル香港IBM」というネオン表示がある。

うっすらと電子音、たとえば電話線でインターネットをつなぐ、ピー、ヒョロロロの音のような、古き良きテクノロジーの音がする。

暗くなり、ネオンの明かりだけになり、やがてそれも消える。

かすかな、喫茶店の食器音や人の話し声などの環境音がして、

もう一度明るくなると、舞台上に女が座っている。

開演。

1・1 ●喫茶店（1988年5月午後15時）

女、真ん中のテーブルに向かい、座って待っている。

女の前にコーヒークップがひとつ。

女は、赤いワンピースにソバージュヘア。1980年代の香りのするファッション。やや濃いめの化粧。設定としてこのとき23歳である。

喫茶店にはいったときの、あのベルの音。

チェックシャツを着た、ちよつとさえない感じの男が、緊張の面持ちではない  
ってくる。彼はこのとき21歳だ。

この男女は、以降さまざまな時代を演じるが、衣装はずっとこの服である。  
男、女を見て、声をかける。

男「あの」

女もすぐに気が付いて、

女「ああ」

男「本当に来てくれたんですね」

女「え、だって、約束したじゃないですか」

男「そうですけど、そうですね、本当に来てくれるなんて、実はすっぱかされるんじや  
ないかと思って、いや、もう絶対にすっぱかされるような気がしてて、だから、まさか来  
てくれるなんて・・・本当に・・・感動です」

女「変な人ですね」

女、笑う。男もあわせて笑ってみる。

女に手でさりげなく促されて、男も女の向かいに座る。

女「とりあえず、なにか飲みますか？」

男「あ、ああ。なに飲まれてるんですか？」

女「コーヒーです」

男「あ、じゃあ、すみません（店員に話しかける体で）同じものを」

短い沈黙。

男「あの、面白いですよ、映画」

女「そうなんですか、私よく知らなくて」

男「『フィクションナル香港 I B M』、すごい映画です」

女「へえ」

男「SFなんですけど、時代設定はいまから100年後、2088年で、フィクションナル  
香港っていうのは、仮想空間に再現された香港の街で、主人公はそこでルポを書くことにな  
って」

緊張していた男だが、映画の説明によりどんどん饒舌になっている。

女「詳しいですね。好きなんですか？」

男「好きになりました！ さっき観てきたんです」

女「さっき？」

男「はい、朝一番に」

女「え、だって、これから観に行くのに」

男「はい、これから観るのに、もしつまらなかつたら大変だと思って、下見に」

女、やや呆れて笑いながら、

女「なんですか、それ。でも面白かつたんですね。楽しみです」

男、すっかり前のめりになって、

男「それでね、それでね、主人公はそのフィクションナル香港で一目ぼれをするんですけど」

女「あ、ラブストーリーなんだ」

男「そのヒロインはスパイだって中盤でわかるんですけど」

女「へえ」

男「フィクションナル香港は何度もリセットされて、主人公は毎回記憶を失うんですけど、

ヒロインとは何度でもであって、で結局そのヒロインは電子人形っていう人工物だった、見せかけて、実は電子人形なのは主人公のほうだったんです！」

女「え、それで？」

男「それで終わりです。ラストは泣きました！」

女「なんで言っちゃうんですか！」

男「え？」

女「これから観ようっていうのに全部言っちゃうなんて・・・（笑って）本当に変な人ですね」

男もあわせて笑ってみる。

女、笑うのをやめて、ちよつと考える。男はまだ笑っている。

女、今度は真剣に問う。

女「え、なんで言っちゃうんですか？」

男「はい？」

女「これから観るんですけど私」

男「・・・ん？」

男、女がなぜ機嫌を損ねているのかあまり理解していないようだ。

女「だからー、これから観るのに、全部言っちゃったら楽しくないでしょ？ あ、どんどん腹立ってきた」

男「え、すみません、すみません」

女「すみませんとかじゃなくて・・・えー？ あ、だめだ許せない、いや。帰ります」

女、ハンドバックをつかみ、席をたち、出口のほうへ。

男「え！ なんで！」

男、追って、

女「だってもういま聞いたんで全部」

男「言っていないこともあります！ フィクション香港がなんのためにあるのか、とか！」

女「なんのためにあるんですか？」

男「これがね、一種の計算装置で、いろんな運命を予測するために」

女「はい言っちゃったー、これで本当に全部聞きました。じゃ、さよなら」

女、再び男に背を向けて去ろうと、

男「待ってください！ 待ってください！ 大丈夫です！！！」

女「なにが」

男「分かっても、面白いから」

女「なんで？」

男「だって僕は観てきたから！ さっき！ それでもこんなに、もう一回観たいと思ってるんです！」

女「私はそういうの嫌なんです！」

男「最初の5分だけでも観てください！ 一番最初に主人公が面接するとき、面接相手と入れ替わって、それはお互いバーチャルビジョンだから」

男、さきほど自分が見てきた映画の、「コーデイネイトチェンジ」を再現し

ようとジタバタしている。

女「へえすつごく面白い。ゼーんぶ分かりました。さよなら！」

女、大股気味に、ヒールの音を響かせて去る。

女が出ていくときに、喫茶店のベルの音。  
すっかり女の姿が見えなくなつてから、男は一人でタイトルコールをする。  
男「1988年5月のことだ。僕たちは、そのあと、二度と会うことはなかった。やみ・  
あがりシアター第20回公演」

### 電子音声 「フィクショナル香港IBM」

タイトルのネオン表示が点灯する。この電子音声は、このあと何回か鳴るが、  
そのたびにネオン表示が同様に光る。

### 音楽

本作品には、オリジナル楽曲が使用される。

「フィクショナル香港IBMのテーマ」であり、オーケストラ風の、歌詞の  
ない壮大な音楽。

作中で音楽と指定されるとき、この楽曲の一部を流している。

ここではその15秒ほどが大音量で流れ、この間に映画の登場人物がすべて  
登場し、去っていく。

男女は、中央で、男の口を女がふさぐポーズで静止する。

それは、言わないでね、というような象徴的なポーズに見える。

### 1・2〇面接（映画）

仮想空間。夜。かすかに海の音。

ビクトリア湾をはさんで、香港島を、ここ九龍から見ている、二人の人物。

一人は、イギリス風にスーツを着こなしループタイをつけた、笑顔を顔に張  
り付けたような、補佐官。貴族的な身のこなしの、中年ながらすっきりとし  
た男である。

もう一人は、「I」という若手作家で、Tシャツにジーンズというラフな恰  
好をしている。

これは、さきほどの喫茶店にいた男が、最初の5分だけでも見てほしいと言  
っていた、「フィクショナル香港IBM」の冒頭である。

実際にこの1・2のシーンは5分程度で演じられる。

表記について。

### ※コーデイネイトチェンジ※

によって、演じ手の入れ替えを行う。

このシーンにおいては、はじまりにおいて、補佐官とIはそれぞれ小林と奥  
山によって演じられている。これが一応の本役ではある。

ざっくり言うと、この1・2のシーンにおいては、激しく演じ手が入れ替わ  
った挙句、元に戻る、ということが起こる。

演じ手が変わっても、セリフは一貫して役柄に紐づく。小林が演じようが奥  
山が演じようが、同じように

補佐官「セリフ」

と表記される。これはこれ以降のシーンでも同様である。

補佐官、目を見開いて珍しそうに見渡すIに、

補佐官「驚きましたか？」

I「まあ、正直言って度肝抜かれたよ。この九龍（クーロン）が作り物なんて信じらんねえ」

I、地面のたしかさを踏みしめる。

補佐官「ここはまだ作りかけですから、私たちIBM社員しか入れません。ビクトリア・ハーバーをはさんで向こう側、あの香港島全体、約80平方キロメートルが、いま市民のみなさんが住んでいる、現状のわが町全体です」

I「びっかびかじゃねえか」

I、海向こうのネオンの光に目を細める。

明らかに補佐官のほうが年齢も立場も上であるが、Iはぞんざいな、えらそうな態度であり、そのスタンスはやや古い映画の主人公によくあるタイプという感じ。

補佐官、光景をうっとり眺めつつ、

補佐官「100年前、1988年の香港の街並みが再現されているんです。ノスタルジックでしょう」

I「にしてもいきなり人の脳に電極ぶち込むとは、大企業さんもずいぶん乱暴だな」

補佐官「入国手続きはなかなか手間でしたでしょう」

I「洗浄やら消毒やら1日がかかりだったよ」

補佐官「みなさん、一度入ると基本的にでませんからね」

I「そうなのか？」

補佐官「あなたを、なんとおよびすればいいですか？」

I「じゃあ、Iで頼むよ。ペンネームだけど」

補佐官「OK, ミスター「I」。今時、どこの仮想空間にもゴーグルを着用するだけで、あるいは一本ケーブルをつなぐだけでアクセスできるでしょう？」

I「まあな」

補佐官「そこで人々は動物やらアニメやらのビジュアルを着こなし、おもちゃの銃を打ったりしている」

I「経験があるよ」

補佐官「我々は、リーディングカンパニーとして、そういった、子供じみた仮想空間を過去のものにしたとを考えています」

というセリフのなかで、補佐官はIに向かい、空中で見えないパッドを操作するように、なんらかのコマンドを入力する。Iはその動作を見てはいない。

※コーデイネイトチェンジ※Iと補佐官※

これをもって演じ手を入れ替え、補佐官を奥山が、Iを小林が演じる。

補佐官「ここではだれも空を飛ばないし、10万馬力を出せない。ただ、本物としか思えない肉体を手に入れ、あなたはあなた自身として暮らす」

I「たしかにこの全身感覚は、ほかでは味わえない」

コーデイネイトチェンジは立ち位置の変更などは伴わず、ただそれぞれの振る舞いが入れ替わるのみである。

チェンジの間をとることもなく、セリフは途切れずなめらかに続いて



いく。

補佐官「歩く、笑う、モノを食べる、瞬きをする。意識的な行動から肉体の生理現象までつぶさに再現するこの技術は他社の追隨を許しません」

I「だいたい分かったよ、俺たちのビジネスの話をしようぜ」

補佐官「OK、ミスターI」

I「なんで俺なんだ？ あんたがいま演説したあたりを」

補佐官（このとき奥山）はIのセリフ中にコマンド入力。

※コーディネイトチェンジ※Iと補佐官※

最初の演じ手に瞬時に戻る。

I「そのままコマンドシヤルにすればいいだろう」

補佐官「ミスターI、あなたはその若さでずいぶん売れっ子の作家さんだとか」

I「おほめにあずかり恐縮だが、読んだことあんのか？ ノンフィクションなんて」

補佐官はIのセリフ中にコマンド入力。

※コーディネイトチェンジ※Iと補佐官※

入れ替わる。

I「書いたこともない」

補佐官「それでいいのです。あなたには」

補佐官、コマンド入力。

※コーディネイトチェンジ※Iと補佐官※

入れ替わる。この時点で最初の演じ手に戻っている。

補佐官「現実には生きる人々をワクワクさせるような」

I「子供じみた？」

補佐官「（苦笑して）そう言ってもいいですが・・・ルポルタージュを書いていただきたい。ここに生きる魅力的な物語を」

I「大企業さんの考えることはよくわかんねえな」

補佐官「まもなくマントウ祭りを行う予定ですから、そのあたりも題材に」

I「なにをネタにするかは俺がきめるよ」

補佐官「すると、ルポは書いていただけですね？」

I「まあな」

補佐官「ありがとうございます。ところであなた、今私とお話している間に、何度か入れ替わったのにお気づきでした？」

I「は？」

補佐官「私とあなた。コーディネイトの入れ替えを行っていたのですよ」

I「ああ、そういやなんか景色変わるなって思ってたよ」

補佐官「ふふ、ちよつと驚かせようと思ったんですが、全然でしたね」

I「まあ」

補佐官「これも我が社の自慢の技術でしてね、仮想空間の外部にエンジニアがいるだけでなく、こうして内部から一定程度の操作が」

補佐官が得意げに話しているあいだに、I、空中になんらかのコマンドを入力してみる。と、

※コーディネイトチェンジ※Iと補佐官※

入れ替わる。

補佐官「できるように、ん？」

補佐官（このとき奥山）は、入れ替わりに戸惑っている。

I「おもしろえなこれ」

補佐官「ちよつと、どうして」

I「なるほどな」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「こりやたしかにすごい」

補佐官「なぜこんなことが、あなたには」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

補佐官「コーディネート入れ替えの」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

補佐官「権限を与えていないはずだ」

I「見様見真似だ」

驚愕し、逃げ回る補佐官を追いかけのように、面白がるIはコーディネートチェンジを連発する。もちろん、逃げる側も追いかける側も瞬時に入れ替わってしまうので、交互にセリフを言いながら、追ったり逃げたりしている。

I、手早くコマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「俺むかしつから器用なんだよ」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「見りやだいたいできるっつうか。」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「運転とか」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「ナンパとか」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「コツさえ」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

I「つかめば」

I、コマンドを入力。

※コーディネートチェンジ※Iと補佐官※

短時間での大量の入れ替わりでふらふらになっていた補佐官、ついに倒れる。この時点では補佐官とIはもともとの演じ手と逆になっているので、いま倒れているのは奥山の演じる補佐官である。

I「おい、大丈夫かよ」  
補佐官「酔った」

I「酔った？」

補佐官「ちよつと戻せ」

I「ん？」

補佐官「もとのコーディネートに」

I「ああ」

I、コマンドを入力。

※コーディネイトチェンジ※Iと補佐官※

ここで、このシーンの最初の演じ手と役柄の対応に戻る。

補佐官、息を整えて、恐れをなしたようにIを見て、

補佐官「はじめてだこんなことは。あなたは期待以上の人だ」

I「悪かったって」

補佐官「くれぐれも悪用しないように！」

I「OK」

とくに反省した様子もなくへらへらしているIに、補佐官はIBMの赤い手帳を懐から出して渡す。

補佐官はまだ腰をぬかしたままだが、手をIに差し出して、

補佐官「採用だ。フィクショナル香港にようこそ」

二人、握手。

力強く手を握ったタイミングで、

音楽 約1分

ここでは、爆音の音楽のなか、「フィクショナル香港IBM」のあらすじすべてが、アクトとダンスの間のような動きで表現される。

Iはフィクショナル香港市民たちと交流し、Uと出会い、さまざまな策謀に巻き込まれ、補佐官は何度もフィクショナル香港をフレッシュしてIは記憶を失うが、何度でもUと出会って彼女を求める。

やがて世界にはIとUの二人きりになり、二人も消え去る。

1・3 ●路上（1988年5月。18時ごろ）

映画館から出てきた、先ほどの男女。

一瞬二人で立ち尽くし、女が口火を切る。

女「・・・面白かった！」

男「でしょ、でしょ、でしょ」

男、わが意を得たりと、とても興奮している。

女「え、本当に面白かった！」

男「そうでしょ、そうでしょ」

女「観てよかった！」

男「そうでしょう！ ほら、言った通りでしょ」

男、喜びのあまりほとんど飛び跳ねている。

男、女、連れだって歩き出す。

うきうきと足取りも軽い。軽すぎて、スキップのようである。

女「香港で撮影したのかな？」

男「どうなんでしょうね！」

女「香港行ったことある？」

男「ないです！」

女「私も！」

男「行ってみたいですね！」

女「うん、行きたくなかった！」

二人はどんどん加速していて、いつの間にか走っている。

男「なんで僕たち、走ってるんですか？」

女「分かんない！ どこに向かっているの？」

男「分かりません！ なんだか、走りたくて」

二人は、笑いながら、さらにスピードをあげていく。

女「じゃあ、先にとまったほうが負けね！」

男「いいですよ！」

今度は真剣に、しばらく全速力。

すっかり息が上がって立ち止まった二人。

ピンクのネオンの建物が見える。

男「あ、あれ」

女「なに」

男「あんな、びかびか光って、香港の建物みたいじゃないですか？」

女「・・・ほんとだ」

女、ちよつとりアクションに困った様子で相槌を打つ。

男、無邪気に興味を持ったように、

男「なんの建物だろう、ちよつとはいつてみましようよー」

女「・・・いいよ！」

女、少しなまめかしい態度で男の手をとり、二人は建物の奥に消えていく。

#### 1-4 ○キャットストリート (映画)

映画「フィクショナル香港IBM」の、先ほどの続きのシーン。

香港島のキャットストリートにやってきたI。

ミヌエットとラグドールにアテンドされている。

ミヌエットとラグドールはオレンジと水色の髪に奇抜な恰好、奇抜なメイクで、近未来を感じさせるファッション。

ミヌエット「この通りがうちの街の自慢！えーと、」

ラグドール「キャットストリート！」

ミヌエット「それ！」

Iはさきほど九龍で補佐官にもらった赤い手帳に、情報をいちいちメモしながら。

I「いったいここはいつからあるんだ？」

ミヌエット「キャットストリート？」

I「いやこの街自体が」

ミヌエット「原型自体は1980年代から・・・あれ、どこだっけ」

ラグドール「イギリス？」

ミヌエット「そう。そのころ現実の香港はイギリスのもので、IBMの支社があったんだけど、それで、なんだっけ」

ラグドール「中国に〜」

ミヌエット「それ！ 返還されて〜それで〜たしか〜」

I「なんで詳しくねえんだよ、IBMの人間じゃねえのかよ」

ラグドール「あ、名乗ってなかったね、うち、ラグドール」

ミヌエット「うち、ミヌエット」

二人、ばつちりポーズがきまつている。

I「おれはI」

ミヌエット・ラグドール「ん〜？」

二人、首をかしげる。

ラグドール「もう一回言つて？」

I「I」

ミヌエット・ラグドール「ん〜？」

二人、首をかしげすぎて体まで曲がつている。

自分たちの耳を気にしながら、

ミヌエット「同時通訳おかしくなってる？」

ラグドール「なんか、おれはおれつて言ってるように聞こえるんだけど」

I「ああ・・・アルファベットのI、それでペンネームなんだ」

二人、笑う。

ミヌエット「へんなのー」

I「うるせえな」

ラグドール「あれ、なんの話だっけ」

I、舌打ちして、あたためて手帳をみやり、その手帳について怒り始める。

I「いまだき手書きつてどういことだよ、もつとまともな記憶媒体あるだろ！」

ミヌエット、それを説明しようとして瞬時に言おうとしたことを忘れ、

ミヌエット「なんだっけ」

ラグドール「時代設定？」

ミヌエット「そう、この街は1980年代の文明でとめてるから」

I「なんでまた」

ミヌエット「だってただでさえ、なんだっけ？」

ラグドール「ただでさえ仮想空間なのに、そのなかに電子端末があったら、わけわかんないでしょ！」

ミヌエット「まるで〜」

ラグドール「まるで、夢のなかで夢みてるみたいになっちゃう！」

ミヌエット「それ〜」

ミヌエットがなにかを忘れ、それをラグドールが補足するとき、二人は特に

嬉しそうに、仲がよさそうに見える。

Iはそんな二人のキャピキャピとしたノリには閉口の様子で、くさすように、

I「ハイテク仮想空間なんて言いながら中身は時代劇だな」

ミヌエット「失礼な！ こんなに感触があるの、すごいんだよ」

ラグドール「物理演算っていうの！」

ミヌエット「触れる！」

ラグドール「つかめる！」

ミヌエット「撫でれる！」

ラグドール「抱き合える！」

互いに撫でたり抱き合ったりする二人。

I「セックスは？」

二人、そんな下品な質問は今までに聞いたこともないという様子で、Iを非難して騒ぎ出す。

I「悪かったよ！でも普通気になるだろ」

二人、全然騒ぎやまず、猫のようにIを威嚇してくる。

I「うるせえ、しずまれ！！！」

と、路地からヴェドラが突然飛び出してきて、Iの手帳を奪い、そのまま走り去る。

I、衝撃に尻もちをついて、

I「行って！」

ミヌエット「痛いのも！」

ラグドール「物理演算！」

のんびりした感じでIをからかう二人。

I「そんなこと言ってる場合じゃねえだろうが！盗まれたぞ！」

ラグドール「いまセキュリティに通報するから」

ミヌエット「電話どこ？」

街できよろきよろと電話がありそうなところを探す二人。

I、彼女たちのやることを待てずに、

I「待ちやがれ！」

ミヌエット「あ、だめ」

Iは二人を置いて、走ってヴェドラを追っていく。

1・5 ●ラブホテル（1988年5月。19時ごろ）

ラブホテルに入ってきた男女。

引き続きちよつとなまめかしい感じの女と、何かが思っていたことと大幅に違ったのか、神妙な顔ですっかり固まってしまっている男。

女、部屋の様子を見回して、

女「あれみたいじゃない？王様が寝るベッド！」

男「・・・」

女「なんかいかにもって感じ」

女、地蔵のように固まった男に微笑んで、

女「先にシャワー浴びるね」

言葉の通り、シャワーを浴びに行く。

これ以降、透けるパネルの向こうで服を脱いでシャワーを浴びる女が見えてくる。

男は所在無い態度で待っている。

1・6〇路上(映画)

I がちやうどヴェドラに追いつき、首根っこを捕まえる。

I 「てめえ、どういうつもりだ」

I、ヴェドラから手帳を取り返す。

ヴェドラは、下層階級らしい、チンピラのような恰好の若い男。

ヴェドラ 「これ、IBMの手帳だろ！」

I 「だからなんだよ」

I、ヴェドラを殴る。

ヴェドラ 「いて！」

I 「(殴ったときの手の感触に満足して) おお、いいねえ、物理演算」

I、暴力を楽しむように、もう一度殴る。けんかつ早いタイプのようだ。

実力差はあきらかたで、ヴェドラはあつという間にぼこぼこになっていく。

そこに、頭に点滅するパトランプを乗せた、珍妙な警察官のような中年の男、

セキュリテイが駆けつける。

セキュリテイ 「生まれ！セキュリテイだ！」

I 「おお、やつと来たか。こいつがよ、俺の」

I は説明しはじめたのをさえぎるように、ヴェドラが叫ぶ。

ヴェドラ 「おまわりさん！！ 助けてください！」

I 「はあ？」

ヴェドラ 「この男がいきなり殴ってきて」

I 「違う、こいつがスリしやがって」

ヴェドラ、さらにIの説明をさえぎり、サッカーのようにおおげさに痛みが

ながら、地面を転がる。

ヴェドラ 「うああああ殺されるうううううう」

I 「うるせえ」

I、足元を転がるヴェドラを蹴り飛ばす。

セキュリテイ 「やめろ！」

セキュリテイが持っていた警棒をIにあてると、電撃が流れる。

I 「ぎゃー！」

セキュリテイ 「動くな！」

ヴェドラ、このすきにそつと逃げようとする。

状況から見てIが危険人物と判断したセキュリテイはIのほうしか見ていな

い。Iを静止し続けている。

Iも、セキュリテイの警棒が怖くてうかつにヴェドラに近づけない。

I 「おい！」

セキュリテイ 「動くな！」

I 「(ヴェドラが)逃げるぞ！」

セキュリテイ 「動くな！」

I 「おいつてば」

ヴェドラ、Iが無力化されたと思ったのか、むしろ逃げるのをやめて変な顔をしたりしてIを煽る。

I 「くっそ」

I は、セキュリティティに向かつて、さきほどの補佐官とのやりとりで習得したコマンドを入力する。

※コーディネイトチェンジ※ I とセキュリティティ※

セキュリティティ「ん？ん？ん？」

I は自分の手帳を回収する。

さっきまでI だった体で、セキュリティティが大いに戸惑っている。

I の体になってしまったセキュリティティは、目の前の警棒を持った中年警官（中はI）を見て、

セキュリティティ「え、俺？ 俺だ……。どういふことだ？」

I 「わりいな、けどいっかい聞けつて、このままだと本当に悪い奴が逃げちまうから」

セキュリティティ「どうなつてんだ、俺は頭がおかしくなったのか？」

セキュリティティはパニックになっている。

異常を察して、ヴェドドラが寄ってくる。

ヴェドドラ「なんだ、なにが起きた！」

I 「だから……」

セキュリティティ、助けを求めるように、ヴェドドラに対して主張する。

セキュリティティ「俺、俺はセキュリティティだ！ こいつ俺の体をのっとりやがった！！」

ヴェドドラ「なんだつて！」

セキュリティティ「つかまえてくれ！ 俺の体を逃がすな！！」

ヴェドドラ「このやるー！ なんだかしらねえがあぶねえやつめ！」

ヴェドドラ、セキュリティティ、徒党を組んでI ににじりよる。

I 「おい」

セキュリティティ「動くなっ」

I 「なんでそうなるんだよ」

ヴェドドラ「きええええええ」

I、二人に迫られ、ちょうど持っていた警棒で電撃を食らわせ、とりあえず逃げる。

セキュリティティとヴェドドラは電撃でダメージを受けつつもそれを追っていく。

I は路地に駆け込み、一瞬どちらに逃げようか迷ったとき、様子を見ていた

U が裏道を誘導する。

U 「こっち」

I はU についていき、パネルの裏に消えていく。

同じころ、映画の外の世界では、シャワーからあがった女がバスローブ姿で現れ、待っていた男がその姿に釘付けになるとともに、勢いよく立ち上がる。

セキュリティティとヴェドドラはI を見失ったようで、きよろきよろしながらその場を通っていく。

1・7 ● ラブホテル（1988年5月。19時過ぎ）

映画の登場人物が皆いなくなると、ラブホテルの男女が残る。



女ははしやぎ気味に、さきほどの風呂場の感想を述べる。

女「ねえお風呂も、すごいの！ほんとギャグみたいなビカビカの」

男「あの、ここは、ラブホテルです・・・！」

女「そうだけど？」

男「分かってたんですか？」

女「え、うん」

当たり前のことを言い出した男にあっけにとられる女と、そんな女の態度に激しく動揺する男。

男「いや、そんな、え」

女「そのつもりだったんじゃないの？」

男「僕はそんな、そんなことになるなんて、ちっとも」

男、大汗をかいてへどもどしている。

女、男に呆れつつ、

女「わたしのこと、白衣の天使みたいに思ってた？」

男「いいえ、私服のほうが素敵ですよ！」

女「そういう話じゃないと思うけど」

男「いや、でも、本当にそういうつもりじゃなかったってことです！」

女「そういうつもりじゃなかったらだめなの？」

男「そうですよ、あらかじめわかってない！心の準備が」

女「ふーっーん」

女、何事か決心したようだ。

男「え？・・・あの」

女、まっすぐ風呂場のほうに向かう。

男はついていきかけるが、女がバスローブを脱いでいるようなので後ずさりする。

女は、もとのワンピース姿になって戻ってきて、自分のハンドバックをつかむ。

女「じゃ」

女、去ろうとする。

男「え？ あの」

女「ついてこないで」

女の態度は冷たい。

男「え、なんで」

女「一人で帰るから」

男「え、でも、だって、面白かったでしょう！？映画！」

女「映画は面白かったけど・・・あなたがつまんないの！」

男、何も言い返すことができない。

女、立ち去る。

女がすっかり出て行ってしまってから、男、一人で、

男「こうして僕たちは、そのあと、二度と会うことはなかった。若さゆえの失敗を、思い出すたびに、むずがゆい気持ちになる」

1-8 ○路上(映画)

UとI、誰もいなくなったのを見計らって出てきて、

I 「巻いたな」

U 「うん」

I 「助かった」

U 「別に」

Uは全身黒い中華風の服を着た、黒髪の若い女である。

手にはせいろを持っている。

セキュリティの体になったIだが、赤い手帳を持っているので、それとわかる。これ以降も、観客にとっては、手帳を持っているのがIの目印のようになるだろう。

U、Iのことをじろじろとみて、

U 「あんた、この市民じゃないでしょ」

I 「ビジネスで来たばかりなんだ。俺はI」

U 「I、アルファベットのI?」

I 「へんな名前だろ?」

U 「別に」

Iは、彼のいつもの癖で髪をかき上げるが、いまの肉体はセキュリティのものであるため、頭頂部に髪は生えていない。

I、頭部に乗っているパトランプをオフにしながら、

I 「俺、本当はこんな姿じゃないんだ」

U、言い訳めいたIの言葉を気にするでもなく、少し表情で答え、去っていく。

I 「待ってくれ、君は? なんて呼べばいい?」

U 「あたしのことを呼ぶことなんて、もうないよ」

I 「そんなことないさ、教えてくれ」

U 「じゃあ・・・(少しだけ考えて) Uってことにしとく」

I 「U?」

U 「ビジネスが終わったら、早く帰ったほうがいい」

I 「帰るって」

U 「これは警告。じゃあね」

I 「あ、おい」

U、こんどこそ立ち去ってしまう。

I、その去っていく後ろ姿に見とれ、口笛を吹く。  
すぐに我に返って、悔いる。

I 「くっそ、こんななりじゃなけりやなあ」

フィクショナル香港IBMのテーマ音楽が小さく流れ始める。

I、気を取り直して、決めセリフ。

I 「これつきりにはしねえからな!」

## 音楽

この音楽の間に、映画の外の男が、女を待っている。  
女がやってきたタイミングで、雨が降り始める。  
男は持っていた傘をさし、女をそこに入れる。  
二人はそのまま、楽しそうに映画館に向かう。

1・8 ●雨のなか（1988年6月）

雨が降っている。男女は、映画館から出てきたところ。

先ほどの待ち合わせのあと、映画を観たさらに後である。

男の傘に二人ではいつている。

女「残念だなあ、最後なんて」

男「上映期間、延長するように、電話したんですけど、はがきも出したんですけど、ダメでした」

二人はのろのろと歩いている。

女「結局、何回観たんだっけ」

男「あ、そうですね、ええと・・・9回か、10回か」

たとえば駅のまえのようなどころに差し掛かったのか、二人は自然に歩みをとめ、ほんの少しの沈黙ののちに、女、

女「じゃあ、わたしこっちだから」

男、妙に断固として提案する。

男「写真をとりませんか」

女「写真？」

男「はい、記念に・・・」

男、カメラを出す。「写ルンです」である。

女に傘を渡し、男は自分は雨の中に出て、写ルンですを構えてシャッターを切ろうとするが、

女「・・・わたし一人で写ればいいの？」

男「あ、じゃあ一緒に・・・すみません」

男、ちやうど歩いていて、通行人に声をかける。

男「写真、とってもらってもいいですか？」

通行人「写真・・・」

ところで、この通行人は便宜上ライスボールと同じ人物（小嶋）が演じているため、奇抜なチャイナドレスを着ているが、ここではとくにそれには触れられない。

通行人、写ルンですを受け取り、撮ろうと、

通行人「はい、チーズ・・・笑顔が、かたいみたいですけど」

女、ほんの少しあてつけのニュアンスを含んで、

女「ちよつとがっかり、することがあって、」

通行人「あらあ」

通行人、写真をとって、写ルンですを男に返し、去っていく。

男「この写真、現像するので、お渡ししに行ってもいいですか？」

女、嬉しそうに、

女「ああ、いいよ」

男「って言おうと思ってたんでした」  
女「ん？」

男「今日でほら、フィクション香港おわっちゃうから。次に会う口実がほしいなあって思  
って！」

男の笑顔は輝いているが、女は対照的に表情を曇らせ、深くため息をつく。

女「なんで言っちゃうかなあ・・・」

男「え？」

男、なにもピンと来ていない様子。

女はそんな態度にいらいらしてまくしたてる。

女「嫌なんだってそういうの！ 行き当たりばったり、毎日びっくり、予想外！ そうい  
うのが好きだしそういう人がタイプなの！ だから、そうだな・・・ここで別れよう」

男「え！」

女、傘から出て、濡れながら、楽しそうに、

女「もしわたしたちが運命のひとなら、きつと偶然に、サプライズ的に、また会えると思  
う。運命が引き合わせてくれたら、また会おう！！」

そのまま女の短い語りになる。

女「こうして、私たちは、そのあと二度と会うことはなかった。運命の人じゃなかったつ  
て」と

1・100バー「ブルーハウス」(映画)

フィクション香港にある、バーの中。ハードボイルドな、猥雑な雰囲気  
ある場所である。

スタンディングスタイルで、ライスボールが立ったまま酒を飲み、マスター  
がけだるげにグラスを拭いている。ライスボールはチャイナドレスにお団子  
髪の女、マスターは顔の半分が青いあざになっている男。

補佐官とI。中央の机の前にいる。

補佐官がIを詰めている最中。二人の顔の距離はすぐにキスできるほどに  
近い。

テーブルのうえには、なぜかせいろがおいてある。

補佐官「悪用するなって言いましたよね？」

I「まあ、ちよつとした行き違いってやつだ」

補佐官、Iへの怒りを込めているかのように、大声で注文をする。

補佐官「(マスターに)バーボン！！」

面接していたころの優しい態度がウソのようである。

I、引き続きセキュリティの姿ではあるが、とくに反省の態度が見えない点  
は相変わらずである。

I「あ、俺もバーボン」

マスター「あいよ！」

マスターはそんな二人に対し、かなり不愛想。

I「まあこれから気をつけるって」

そこにセキュリティが大泣きする娘を連れてやってくる。

娘「いやだああああ、だれええ、この人だれえええ」

セキュリテイ「大丈夫だから、パパももうすぐもとに戻るから」  
娘「やだやだ離して」

このセキュリテイは当然、Iの体である。

娘は、それを自分の父と認識できずに泣いているのだ。

娘、I（セキュリテイの体）を発見して、  
娘「あ！ パパ！ パパだ！ 助けて！ 変な人がね、誘拐してきたの！ このひと誘拐犯なの！」

セキュリテイ「パパは僕なんだよ」

娘、泣いている。それに取すがってセキュリテイも泣いている。

補佐官、そんな親子に毅然と声をかける。

補佐官「セキュリテイ、この件あなたも悪いんですよ」

セキュリテイ「はい、申し訳ありません」

補佐官、Iに命令。

補佐官「ほら、さっさと戻せ」

I「はいはい」

I、セキュリテイに向けてコマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※Iとセキュリテイ※

ここでセキュリテイとIはもとの体にもどる。

セキュリテイ「リリー！」

娘「パパ！」

セキュリテイ「リリー！ パパだよ！」

娘「怖かったよー」

セキュリテイ「ごめんな、ごめんなああ」

父娘、抱き合う。

ところで、この娘は10歳くらいの言動だが、見た目としては普通の成人女性である。着ているTシャツに、子供の描いた絵がデザインされている。

マスター「あいよバーボン」

マスター、乱暴に酒を置く。

I、一口のんで、床にペッと吐き出し、

I「まっずいな本当に酒か？」

補佐官、Iのグラスの酒をIにぶっかける。

補佐官「なめんなよ」

I、ひるまずに、髪をかき上げる。

補佐官「自分の立場分かってんのか」

補佐官、自分もバーボンを呑む。

I（マスターに）おい、バーボンもう一杯」

マスター「あいよ」

娘は泣き疲れて眠ってしまったようだ。

父は娘をおぶって去っていかうとする。

セキュリテイ「じゃああの、僕はこれで」

I「あ、おい待ってくれ」

セキュリテイ「あ？」

I「俺を助けてくれた女をみてないか」  
セキユリテイ「女？」

I「黒髪の女だ、知らないか？」  
セキユリテイ「知っても教えるもんか！」

セキユリテイ、捨て台詞を残して去っていく。  
マスター、追加のバーボンを持ってくる。

Iは今度はマスターに、

I「なああマスター、そんな女を知らないか」

マスター「すてきな女は、ここにはたくさんいるさ」

補佐官「今度は女漁りか、ミスターI、なんのためにお前をここによんだかわすれちまつたか？」

補佐官、後半はほとんど怒鳴りつけているが、Iも断固として、

I「主人公を見つけたんだ」

補佐官「主人公？」

I「いいか、物語には主人公つてもんが必要なんだ。今回は彼女だ」

補佐官「お前に依頼したのはこのフィクショナル香港のルポルタージュだ」

I「彼女を探してくれ」

補佐官「断る！」

I「だったらルポの話もなしだ！」

補佐官はふっと唇をゆがめて、

補佐官「まさか、勝手に出国できると思ってるのか？」

I「は？」

補佐官「ミスターI。書き上げるまでこのフィクショナル香港に缶詰だ」

I「おいふざけんなよ、こんな酒のまじいところで」

補佐官「もうすぐマントウ祭りだ」

補佐官、机にあつたせいろの中から、マントウを取り出して食べる。

補佐官「悪くないな、マスターこのマントウどうしたんだい？」

マスター、それに答えずただ首をすくめるだけである。

そこに、客として占い師がやってくる。南国の鳥のように派手な髪色をしている。店内に響く大声で、

占い師「あたしが来てやったよ！ 喜びな！」

マスター、うんざりした態度で、

マスター「天にも昇る思いだよ」

占い師「紹興酒」

I、強く宣言するように、

I「俺は彼女を、死ぬ気で探す」

I、バーボンをあおる。

補佐官「死にやしない。なんといっても、「死」はまだ実装されてないからな」

I、さらに酒をあおると、ふらついて、補佐官がそれを支える。

補佐官「味は悪いが、ここの酒は強いんだ。来い、宿に案内してやるよ」

I「眠れるのか？」

補佐官「眠りは実装済だ。ただし、夢はみないぜ。こんなところで夢まで見てちゃ、わけわ

かんねえだろ」

補佐官はテーブルに紙幣を置き、Iを連れて去っていく。

ライスボール「さわがしい連中だったわね」

マスター、店の奥に声をかける。

マスター「出てったよ」

奥から、Uが出てくる。

U「マスターありがとう」

マスター「どうも常に女の味方をしちまう、あんたのことだってよく知りはしないのに。それでいつも損してきたんだがね。きくかい？」

マスター、甘い態度でUに密着するほど近づいている。

占い師「やめときな、時間の無駄だよ」

ライスボール「ねえ彼、作家なんですってね」

U「ええ」

マスター「あんたが主人公だってな」

U「よくわからないわ」

ライスボール「あら、きつとそんなの口実よ。彼あなたに恋をしてるみたいだった」

ライスボール、ほろよいの様子ではしゃいでいる。

マスター「恋、ね。俺の全部の指に指輪がはまってるのに、肝心の左手の薬指はからっぽだ。その理由、気になるかい？」

マスター、Uの肩を抱く。

占い師「気にならないよ！」

ライスボール「ねえ占い師さん、恋占いして」

占い師「あたしは高いよ！」

マスター「あんたこの店にいくらツケしてると思ってたんだ、そつから融通しとくよ」

占い師「(舌打ち)」

マスター、Uにぼつちりウインクをする。

マスターは、占い師をのぞく女には優しく、男にはぞんざいな態度をとるよ  
うだ。

ライスボール「当たるのよ、このひとの占い」

占い師「口をあけな」

Uが口を開けないので、占い師はUの鼻をつまみ、無理やり口を開けさせる。

ライスボール、それを見て感銘をうけて、

ライスボール「鼻をつまんだら口が開いたわ。いつのまにこんなことまで実装されて！」

ライスボールとマスター、それぞれ鼻をつまんでみる。

やはり口は開き、そのことに感動する。

そうこうするなか、Uは占い師に口のなかを調べられている。

占い師「じつとして・・・あんた、フィクショナル香港市民じゃないね」

U「ろうひへ？(どうして？と言っている)」

占い師「はい、息とめて」

ライスボール、マスター、U、息をとめる。

占い師「かといってIBMの社員でもない。ここに来たのは命令があったから、あんたの目的は」

三人、ぶはつとなつて、必死に息を吸う。

ライスボール「苦しい、死んじゃう」

占い師「死にやしない、ここではだれも死なないんだから」

マスター「そりやそうだが苦しいは苦しいぜ」

ライスボール「(恍惚として)でもちよつと気持ちがいいわ」

マスター「あんたもおかしなひとだ」

ライスボール「それで恋の行方は？」

占い師「分からん」

マスター「分からん？」

占い師「あたしや未来のことは見ない主義だ」

マスター「そんなの占いつて言えるかね」

ライスボール「先行き不明の恋つてわけね！」

1・11〇日陰、第5番(映画)

フィクショナル香港のうち、正規に構築されてIBMの目の行き届いた部分を日向、空間の隙間の、IBMが感知できない部分を、俗に日陰とよぶ。

ここは壁のなかに広がる日陰、第5番たちのアジトである。

日向からヴェドラが叫ぶ。

ヴェドラ「パンの兄貴、ちよつと助けてください！」

パンがやってくる。

パン「ヴェドラか？」

ヴェドラ「捕まえました！」

パン「そりやえらかったが、またはいれねえのか」

ヴェドラ「僕はいれるんです。こいつが」

パン「ひっかかってんのか？」

ヴェドラ「兄貴、一度出てもらえますか」

パン「しょうがねえな」

パンは、壁(パネル)の隙間を抜けて、ヴェドラのほうへ。

パンとヴェドラがパネル向こうで、振付のような奇妙な動きをやっているのが、透けて見える。

やがて彼らは、縛られたIを連れて入ってくる。

Iに意識はない。

パン「気絶してんのか」

ヴェドラ「酔っぱらってるだけみたいだす」

パン、Iの頬をぺちぺちとたたく。

パン「おはよう」

I「ここは・・・？」

ヴェドラ「ここにはセキュリティはこないぜ、なんたって日陰だからな！」

I「日陰？」

パン「どんな街でもアングラはある」

I「仮想空間でさえも、か」

パン「空間の、ちよつとした隙間みたいなところですよ」



I「そんなところに連れてきて何の用だ」  
パン「あなたは、コーデイネイトチェンジの権限を付与されているんですか？」

I「あ？」

ヴェドラ「セキュリティの体をのっとった！俺はたしかにこの目でみたんだ！」

I「別に権限を付与なんかされてない、勝手にできるようになっただけだ」

I、反抗的な態度である。短い沈黙ののち、  
パン「うちのおやじとはなしてもらう」

パン、一度去っていく。彼は声がしやがれ、服装からもカタギのようには見えない。体が大きく、いかにも強そうである。

ヴェドラ「良かったな」

I「いまの俺の状況でなにか良かったことがあるか？」

ヴェドラ「おやじに会えるのがさ！俺はおやじをみたり、声をきいたりするのがものすごくすきなんだ！」

I「それはおまえの良かったことじゃないか！」

大統領、パンの肩にのる形で登場。ネグリジェを着てよだれかけをつけた、可愛らしい女の子の姿をしている。

大統領「君が作家先生だな」

大統領は滑舌がままならない。幼児のようなしやべり方である。

I「なんだお前、赤ちゃんか？」

大統領「この街に子供はいない。肉体の成長は実装されてないからな」

ヴェドラは大統領が出てきたことに興奮している。

ヴェドラ「おやじ！おやじ！未来の大統領！」

大統領「わたしたちはフィクショナル香港の独立を目指す革命組織「第五番」だ」

I「仮想空間が独立だって？」

大統領「もう各国には手をまわしてある。フィクショナル香港は、IBMの支配からのがれ、世界ではじめて仮想の土地を国土として、独立国家の道を歩むのだ」

I「・・・月は無慈悲な夜の女王か」

パン「なんだ？おやじが女王だって？」

大統領「文学だよ。そのたとえも悪くない」

大統領、キヤツキヤツと赤ちゃんのように笑う。

I「革命なんか興味ないね」

大統領「フィクショナル香港市民はみな、現実の肉体にチューブをつながれ、夢をみるようにこの仮想空間にアクセスしている・・・と思われる」

I「違うのか？」

大統領「IBMは人口の水増しを行っている。人間精神をもたない、電子人形がいる」

I「人形？」

大統領「そのへんの壁や、ビルなんかと変わりない、単なる人工物だ。そいつらがなにくわぬ顔でまぎれている」

I「ふむ」

大統領は、唾液を嚥下できないのか、定期的につばを床に吐いて、ヴェドラがそれを宝物のように集めている。

大統領「そこで君のコーデイネイトチェンジだ」

I「これのことか」

I、いつの間にか拘束していた縄を解いている。

パンとヴェドドラがあっ！と思った隙に、パンに向かってコマンド入力。

※コーディネートチェンジ※パンとI※

パン「うわ！」

I「おっと」

ヴェドドラ「兄貴？ 兄貴？」

パン「やられた」

I「思ったより重いなお前」

I「思ったより重いなお前」

パンの体になったIは、肩に乗っていた大統領をおろそうとする。

絶叫するパンとヴェドドラ。

パン「落とすな、絶対！ ヴェドドラ！」

ヴェドドラ「おやじ！ 大統領！ こちらへ！」

大統領を落とそうとするIから大統領をひきとり、丁寧に、四つん這いになったヴェドドラの背中の上に乗せる。

パン「慎重に！ 慎重にやってくれ！」

大統領、ヴェドドラの背中の上に乗って安定し、パンとヴェドドラは一安心するが、Iに対しては激怒している。

ヴェドドラ「おやじはぜったい落としちゃダメなんだぞ！」

パン「おやじはなあ、一度IBMに見つかって、それからマークされてんだよ！」

大統領「そう。フィクショナル香港の壁や地面に一瞬でも付けば、私は強制退去させられてしまう」

大統領、また赤ちゃんのようにキヤッキヤツと笑う。

I「たいへんだな」

大統領「それで、電子人形さがしを手伝ってくれるのか？」

I「やってもいいぜ」

大統領「手あたり次第、コーディネートチェンジしていけばいい。私の仮説では、相手が電子人形ならなにか違いがあるはずだ」

I「OK。その代わり」

大統領「その代わり？」

I「女を探してる。協力してくれ」

パン「なんて女だ？」

I「U」

第五番の人々、耳を気にする。

I「そういう名前だ、翻訳ミスじゃない」

1・12 ●喫茶店（1990年5月）

男、店員と話しているようだ。

店員「そうですね、すみません、ちよっと・・・」

この店員は、マスターと同じ役者が演じるため、顔にあざがあり恰好も奇天烈ではあるが、とくにこの場面では言及されない。

女「ねえ、もうよくない？ 遅れちゃう」

男「ここで落としたんだと思うんだよ」

女「そんなに大事なの？」

男「うん、けっこう高かったし・・・すみません、ちょっと探してもいいですか？」

店員「まあ、どうぞ」

女「ねえ」

男「うん、でも大事なんだ」

男、はいつくばって店内を探している。

女、ほんの少し待つがすぐに焦れて、

女「ねえってば」

男「うん」

男、まだ探している。

女、我慢の限界という風に、

女「ねえ遅れちゃうじゃない、夜景の見えるレストラン、わたし楽しみにしてたんだから！」

男「分かってるよ！！ もう！ いま探してるだろ！」

女「何探してるのよ！」

男「指輪だよ！」

女「は？」

男「だから、指輪！ そのレストランでプロポーズするつもりだったの！」

店員「ありました！ ありましたよほら！」

店員が笑顔で、発見した指輪のケースをパカッと開けた状態で持ってくる。

女が絶叫。

女「なんで言っちゃうのー！！」

男「だってなに探してるか聞くから！！」

女、本当に信じられないという風に、

女「この2年、私のなをみてたのー！！」

店員、ただならぬ雰囲気におびえつつ、手に持った指輪を気にして、

店員「あの、これ」

店員には目もくれず、男も言い返す。

男「そっちこそ、いままで一緒にいて、なんで分かってくれないんだよ！」

女「は？」

男「僕は、聞かれたら言っちゃうんだよ！ 聞きたくないなら聞いてこなければいいじゃない。そっちが黙ってればこっちも今言わなかったじゃない。黙ってるよ」

短い沈黙ののち、

女「あ〜く分かった」

男「分かってくれたらならいいけど」

女「どうするべきか分かった。さよなら」

女、去っていく。

一人になった男に、店員がそっと指輪を差し出す。

店員「あの」

男「こうして、僕たちはそのあと二度と会うことはなかった」

店員から指輪を受け取り、

男「指輪は帰り道に捨てた」

1・13〇 ミヌエットとラグドール（映画）

二人、きゃあきゃあど笑いながら歩いている。  
遠くから、マントウいりませんか、というUの声がする。

ミヌエット「あれ、うちらなんて笑ってたんだっけ」

ラグドール「忘れちゃった・・・！」

二人、爆笑。

そこでUが出てくる。

U「マントウいかがですか」

持っていたせいろを開いてみせる。

ミヌエット「おいしそー、くださーい」

U「はい、おふたつ？」

ラグドールのほうは、そのマントウから顔を背けて、

ラグドール「ひとつで！」

U「はいどうぞ」

U、ミヌエットにマントウを渡す。

ミヌエット「お代は？」

U「いりません、もうすぐお祭りですから！」

ミヌエット「なんだっけ？」

ラグドール「マントウ祭り、もうすぐだもんね！」

ミヌエット、ラグドールにマントウを差し出す。

ラグドールはとっさに鼻をおさえて、

ラグドール「いけない」

ミヌエット「え、おいしそうなのに」

ラグドールはマントウから逃げるようにして、二人去っていく。

1・14●夜の路上（1990年、秋）

男女、とぼとぼと歩く。女の実家からの帰り道である。

男は、頬を氷で冷やしている。虫の声などが聞こえる。

女、男を気遣うように、

女「ごめんね」

男「いや、また訪ねてみよう、うん」

女「だって、何回目？」

男「・・・」

女「いっそ、駆け落ちでもしちゃう？」

男「だめだよ、ちゃんと許しはもらわないと」

短い沈黙。

女、あえて明るい声で、

女「無理じゃない？ あなたがちゃんと働かないと。この夢追い人！」

ふざけたように、男にパンチする。

男「あの」

女「ほんとほうすうす分かってるでしょ？」

男「・・・」

女「ほら、わたし一人だからさ。パパのことも心配だし。でも、あなたにも、夢を、あきらめてほしくない。そんなに映画が好きなのに」

女、左手薬指から指輪をとって、返す。

女「がんばってね」

男、涙目になって、女の手にすがり、

男「ごめん、ほんとにごめん、ごめん、君の時間、無駄にした」

女「そんな風に言わないで」

男「・・・ありがとう」

フィクションナル香港IBMのテーマ音楽が流れ始める。

女、男から走って離れ、叫ぶように、

女「絶対、映画撮ってよね。観に行くから！！」

そのまま短い語り。

女「こうして私たちは、そのあと二度と会うことはなかった！ この別れを一度も、後悔はしなかった！！！」

## 音楽

この音楽が流れるなか、次の1・15のシーンをすべて演じる。

1・15○コーディネートチェンジの旅（映画）

ミヌエットとラグドールが歩いており、ミヌエットのほうは先ほどもらったマントウを食べている。

I（前のシーンから引き続いてパンの体をしている）、ミヌエットに背後から近づいていく。

I「ちよっとお姉さんごめんよ」

ミヌエット「え？なにになになに」

ミヌエットに向けてコマンド入力。

※コーディネートチェンジ※Iとミヌエット※

I「異常なし、か」

ミヌエット「え、なんでなんでなんで」

I（ミヌエットの体）、去っていく。

それを呆然と見守る、ミヌエット（パンの体）。

ミヌエット「うちが、うちがどっか行っちゃう」

ラグドール「え、ちよっと、あんただれ」

ミヌエット「ラグドール、あたしミヌエットだよ」

ラグドール「うそミヌエット？」

ミヌエット「ミヌエットだよ」

ラグドール「うそくやだ」

ミヌエット「うちだってやだ、やだ」

ラグドール「セキユリティよぶ！」

ミヌエット「電話どこー！！」

ラグドールとミヌエット、困り果てながら去っていく。  
Iは、バー「ブルーハウス」へ。

I「おい」

マスター「いらつしやい、かわいいお嬢さん」

I「そりやどーも」

マスター「最初の一杯は店からのサービスだ」

占い師「またナンパかい、いいかげんにしな」

I「ご注文はこれだ」

コマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※Iとマスター※

マスター、目の前に自分の姿があることに驚愕。

マスター「うわ、おれだ・・・！」

I「どうもありがとな」

占い師「マスター、紹興酒！」

I（マスターの体）、立ち去る。

占い師「ちよっと！」

路上。ライスボール、誰かにつけられていることを察して、振り返り、振り返り歩いていく。

が、Iに追いつかれてしまう。

ライスボールは絶叫して助けを求める。

ライスボール「きゃあああああ、通り魔！ 通り魔！」

コマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※Iとライスボール※

I「うるさい女だ」

I（ライスボールの体）、逃げていく。

混乱が広がり、みんな自分の体を探している。

そんななか、せいろを持ったUがマントウを配っている。

U「もうすぐみなさん待ちに待った、マントウ祭りですよー」

## 音楽終わり

1' 16 ●香港（1991年）

香港の雑踏のなか。

おおはしゃぎの女と、困り果てた男。

女「ねえ、見て屋台！ 行ってみよー」

男、手近な通行人（ここではさきほどのシーンにいた映画の登場人物たちが香港の通行人を演じる）に話しかける。

男「んご、どん、さつ、じよー、ろーあー（道に迷いました）」

しかし、無視される。

男、ほかの人に、

男「んご、どん、さつ、じよー、ろーあー（道に迷いました）」

今度は広東語でなんらかまくしたてられた上に笑われ、去られる。

男、絶望して、  
男「だめだ通じない」

女、のんきに、  
女「発音違うのかなー」

男「やっぱりガイドをつけるべきだったんだよ、そう言ったじゃないか！」  
女「自分の力で旅するのが醍醐味でしょ」

男「でもまよってばかりで、何ひとつ計画通りに」  
女「だからそれが醍醐味だって。楽しいでしょ！」

そこで香港のスリ(ヴェドラを演じている役者)がとびだしてきて、  
女がちょうど掲げていた左手から指輪を抜いていく。

女「きゃ」

男「おい！」

スリは逃げていき、女は座り込んでいる。

女「あ、とられた」

男「え、なに」

女「指輪」

男「・・・(ため息)」

女、励ますように、

女「仕方ないっ、醍醐味」

男「醍醐味じゃないよ！」

女「また買えばいいじゃん」

男「買うの俺だろ？ 切符をとるのも俺、手配するのも俺、予定組むのも俺、君はへらへらついてくるだけ！」

女「へらへらってなに？ 笑顔でしょ！ 新婚旅行は楽しいのが一番いいでしょ！ ちよ

っとしたトラブルも思い出に」

男「・・・離婚だ！」

女「・・・はあ？」

男「もう、離婚だ離婚！ やってられるか！」

女「あー、そーですか！」

女、ずんずんと去っていく。

男、見送ってから、

男「こうして僕たちは、そのあと二度と会うことはなかった。パスポートは君が持っていたから、僕は日本に帰るのに相当の苦労をした」

1・17○フィクショナル香港(映画)

補佐官に、体を入れ替えられた人々が殺到している。

パンの体のミヌエット、

ミヌエット「なんとかして！」

ラグドール「かわいかったミヌエットを返して！」

マスターの体のライスボール、

ライスボール「もうめちやくちやですよ」

ミヌエットの体のマスター、

マスター「そりや女の子はすきさ、けどこういう意味じゃないぜ」  
セキュリティ「あいつですよ、あの作家が犯人です！」

補佐官「おい、だれがだれだつて？ もういつかい言ってくれ」

人々、口々に状況を説明する。

補佐官「なんだつて？」

人々、自分の体を示しながら、

ミヌエット「この子がうちで〜」

マスター「これが俺で、」

ライスボール「あたしはどこですか？」

占い師「どうすんだい、おえらいさん」

補佐官「Iのもの体はどなんだ、中身もだ、どこにいやがる！！」

補佐官、Iを探して走りさり、みんなもそれを追っていく。

1・18〇IとU（映画）

U、娘と手をつないでいる。

U「かっこいいお父さんだねえ」

娘「いまは悪い奴が暴れまわっててたいへんなの」

U「そっかあ……。これ、食べな」

U、娘にマントウを渡す。

I、登場。ライスボールの体である。

I「見つけた！」

I、息が切れている。

I「俺だよ」

U、Iをまじまじと見て、

U「もしかして、I？」

I、驚いて、

I「よくわかったな」

U「まあね」

I「・・・会いたかった」

U「へんなの。だいたいなあに？ その恰好」

I「ああ、これはな、こうやって」

I、マントウを食べもせずいじっていた娘に向かって、コマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※失敗※

なぜか、入れ替わることができない。

I「あれ？」

娘「んー」

もう一度試みる。

I「ん？」

もう一度。

しかし、娘とはコーデイナイトチェンジができない。

U「え、なに」

I「お前・・・」



I、娘をまじまじと見て、なにか察した様子である。  
しかし、さして関心もなさそうに、

I 「いや、もういいや、こうしてUに会えたんだから」

U 「何の話？」

I 「いやこの子が」

娘、Uにマントウを返す。

娘 「やっぱりいらぬ」

U 「え？」

娘 「これ、いやなおい」

娘はマントウを返してしまうと、そのまま地面などを見て遊び始める。

Iは、Uに自分の手帳を見せている。

1・19 ●自宅（1997年）

女がテレビを見ている。香港返還のニュースが流れている。

男が帰宅する。

しばしの沈黙のあと、

女 「・・・テレビ」

男 「なに」

女 「テレビ、香港」

男 「ああ。ほんとに返還されたんだな」

女 「ね。すごい、パレード？」

男 「・・・」

小さくとがめるように、

女 「ただいまくらい言えればいいのに」

男は女からは離れたところに座って、鞆から仕事の資料のようなものを取り出す。忙しそうにそれらを確認しながら、思い出したように。

男 「そうだお義父さんから、今日会社に電話あって」

女 「え、パパ？」

男 「そう。いつまで二人でいるのかって」

女 「・・・」

男 「いつかいさ、病院いつてみようか」

女 「えー・・・」

男 「ほしくないの？」

女 「そうじゃないけど、授かりものっていうか」

男 「僕これから忙しいんだよ、2000年問題で」

女 「うーん」

男 「それこそ君の病院は？」

女 「やだよ自分の勤めてる病院になんて」

男 「近いじゃんだって」

女 「嫌だって」

男 「そもそも君のお父さんが電話してきたんだぜ！」

すっかり険悪な雰囲気である。

女は悲しいのか腹立たしいのか、ぼそっと、  
女「・・・二人だけでも楽しいです、くらい言ってくれたらよかったのに」  
男「え？」

女、一度奥にいつて、旅行用の大きなカバンを抱えてくる。  
女「実家に、帰らせていただきます」  
女、そのまま出ていく。

男「こうして僕たちはそのあと二度と会うことはなかった。離婚手続きは、あの恐ろしい君のお父さんを通さないといけなかった」

1・200 フレッシュ(映画)

U、Iの手帳をある程度読んだようで、

U「これが小説？になるの」

I「ああ、まだ書きかけだけど」

U「続き、読みたいな」

I「続きは、Uが書かせるんだ」

U「私が？」

I「君は僕の主人公だ」

U「・・・だったらこれ、スパイ小説だよ」

別の場所で。

補佐官が、たくさんの人に囲まれながら出てくる。

補佐官「ああああああ！！ もう面倒だ！！ やり直しだ」

占い師「やり直し？」

補佐官「フレッシュ！」

補佐官、目に見えないシャッターに手をかけ、さびついたそれを必死に降ろ

そうとしている。

不快な電子音が場に満ちていく。

U「なにか聞こえない？」

I「え？」

U「やばい」

Uが手帳を持ったまま、空間の隙間に逃げていく。

I「あ、おい」

U「I、さよなら！」

迅速に日陰にはいる。

と同時に、補佐官がシャッターを閉める動作。

音楽※※フレッシュ※※

この音楽は、テーマ音楽の一部を逆再生したもので、不安定な音色である。

Iを含め、場に出ていた人は一度倒れ、人形のように去っていく。

2・1 ●自宅(2003年)

薄暗い部屋。

男のパソコンに女が近づき、少し考えて、パスワードを入力してみる。

女「フィクションナル香港、IBM・・・」

男のパソコンのロックが解除される。  
フラッシュゲームが開始され、男Aと女Aが笑いながら登場。  
彼らの衣装は男と女と同じ、赤いワンピースとチェックシャツである。

女A、笑うのをやめて、ちよつと考える。男Aはまだ笑っている。  
女A、今度は真剣に問う。

女A「え、なんで言っちゃうんですか？」

男A「・・・」

女A「これから観るんですけど私」

男A「・・・あの」

女A「これから観るのに、全部言っちゃったら楽しくないでしょ？ あ、どんどん腹立ってきた。いいや、帰ります」

男A「すみませんでした！！！」

男A、土下座。

女A「やめてくださいさういいうの」

男A「いえすべて僕が悪いんです。あでも悪いのは僕であつて映画じゃないんです！

本当に面白いです！ だからどうか、いまのことは水に流して映画を観てください。それで面白かつたねって、二人でおしゃべりしましょう・・・」

女A、男Aが長々語っているあいだにそつと立ち去っている。

男A「・・・ってあれ？」

取り残された男A、呆然。

パソコン前でそれを見ている女は、動揺しつつ、

女「なにこれ？」

女、エンターキーをおす。

ゲームはまたはじまる。男B女Bが笑いながら登場。

男Bの動きにあわせて、さきほどから取り残されたままの男Aも似たような動きをする。

女B「いいや。帰ります」

男B「いいんですか？ 面白い映画が観られるんですけど？」

女B「はあ？ だからもう私にとっては面白くないんですけどば」

男B「あなた観てないでしょう！ 何が分かるんですか！」

女B「観てないけど全部わかっちゃったからもう面白くないんですー」

男B「仮に、仮に、分かっちゃったから面白くないとして、100点が50点になっただけでしょ！ まだまだぜんぜん面白いでしょ50点は！」

女B「0点です！ わかっちゃったら100点でも0点になるんです！」

男B「じゃあ、じゃあ、じゃあ、最初から0点の映画だとしたら？」

女B「は？」

男B「最初から0点の映画だったら、中身を知ってても0点だから、今、なにも起きなかったことになりませよね？」

女B「・・・最初から0点の映画なんて、みません！」

女B、立ち去る。

パソコンを食い入るように見つめる女のところに、男が登場。

男「あ」

女「なにこれ」

互いにとがめるように、

男「なんでみてるの」

女「パスワード単純すぎ。ねえ、なにこれ」

男「これはフラッシュゲームと言って、あ、ジャンルとしてはノベルゲーム？」

女「そういうことを聞いてるんじゃないんだけど」

男「いろんなパターンを作って、おたすけキャラも入れられる」

男、妙に自慢げに、操作してみせる。

男C 女Cが笑いながら登場。

取り残された男A Bは、男Cに連動した動きをする。

女C「いいや、帰ります」

男C「え！ なんで」

女C「だってもういま聞いたんで全部」

近くでコーヒーを飲んでいた知らない人①が話しかけてくる。

知らない人①「あのう」

女C「え？」

知らない人①「許してあげても、いいんじゃないですか？」

女C「え、あのだけですか」

知らない人「さっきからあの、聞こえちゃってましたけど、この人だって悪気があったわけじゃないんだから」

男C「そうなんです」

女C「そういう問題じゃないです」

知らない人①「私も観ましたけど、フィクションナル香港IBM。あれはしゃべりたくなっちゃいますよ」

男C「そうなんです！」

女C「ちよっと」

知らない人①「裏世界みたいな、空間の隙間に、革命組織がいてね」

男C「そうそう」

知らない人「あの、赤ちゃんみたいなのが、かわいいよね」

男C「ええ、テロリストもいいですよね」

知らない人「ヤマダ氏ね！」

男C「そうそう！」

女C「友達ができてよかったですね」

男C「あ」

女C、去っていく。

男「このおたすけキャラは変更もできる」

男が操作すると、男D 女Dが笑いながら登場。以降男A B Cも男Dの動きに

連動する。

女D「いいや、帰ります」

男D「え！ なんで」

近くでコーヒーを飲んでいた知らない人②が激高しながら話しかけてくる。

男D「え！ なんで」

近くでコーヒーを飲んでいた知らない人②が激高しながら話しかけてくる。

知らない人②「いやあんたが悪いよ！」

男D「え？」

知らない人②「さっきから聞いてたけどねえ、全部あんたが悪い！」

女D「え、あのだれですか」

男D「・・・すみません」

知らない人②「足りないよ全然！ もっと頭を下げて！」

男D「申し訳ございません！」

知らない人②「まだ足りないんだよ、オラあ！」

知らない人②、男Dを蹴る。

男ABCも連動して蹴られたようなリアクションをとっている。

男D「あああ！」

女D「ちよっと！」

知らない人②「人に痛みを与えたら、倍の痛みを、感じなさいよ！」

知らない人②、蹴り続けている。

男D「すみませんでした！」

女D「だれか警察！ 警察よんでください！」

女D、走って去っていく。

男「ははは」

女「え、なんで笑ってんの」

男「いや、これは笑うパターンのやつとかいうか」

女「なにこれ」

男「同僚が、お前も作ってみろって。すごいだろ、もちろんまだちやちやだけど、こんな風に、自作できるなんて、まるで未来みたいだ」

女「これ私たちだよな？」

男「あ、うん」

女「きもちわるい、無理無理無理」

男「は？」

女「なんでどのルート行っても私たちが別れるの」

男「・・・」

女「そんなに後悔してるなら、もっと早く言ってくればよかったじゃない！」

## 電子音声「フィクショナル香港IBM」

### 2・2〇面接（映画）

仮想空間。夜。かすかに海の音。

ビクトリア湾をはさんで、香港島を九龍から観ている、二人の人物。

1・2のシーンとまったく同じように補佐官とIがいる。体も、最初のIの体に戻っている。

補佐官、目を見開いて珍しそうに見渡すIに、

補佐官「驚きましたか？」

I「まあ、正直言って度肝抜かれたよ。この九龍（クローン）が作り物なんて信じらんねえ」

補佐官「ここはまだ作りかけですから、私たちIBM社員しか入れません。ビクトリア・ハーバーをはさんで向こう側、あの香港島全体、約80平方キロメートルが、いま市民のみなさんが住んでいる、現状のわが町全体です」

I「びっかびかじゃねえか」

I、海向こうのネオンの光に目を細める。

やりとりや所作も、1・2のシーンと寸分たがわず再現される。

補佐官、光景をうつとりと眺めつつ、

補佐官「100年前、1988年の香港の街並みが再現されているんです。ノスタルジックでしょう」

I「にしてもいきなり人の脳に電極ぶち込むとは、大企業さんもずいぶん乱暴だな」

補佐官「入国手続きはなかなか手間でしたでしょう」

I「洗淨やら消毒やら1日ばかりだったよ」

補佐官「みなさん、一度入ると基本的にでませんからね」

I「そうなのか？」

補佐官「あなたを、なんとおよびすればいいですか？」

I「じゃあ、Iで頼むよ。ペンネームだけど」

補佐官「OK, ミスター「I」」

Iは補佐官に赤い手帳をもらい、握手をかわす。

その二人のシルエットの向こう側、舞台奥のほうで、通りかかる映画の外人により、2・3のシーンが展開される。

## 2・3 ● 帰り道（2004年春）

女と男、とぼとぼと、つれだつて出てくる。

男、ふと立ち止まって、

男「次で最後にしよう」

女「なんで」

男「お金だつて、続かないし・・・それに」

男、ふたたび歩き始める。

女、その背中に、

女「じゃあ、私が40になるまで、お願い」

## 2・4 ○ キャットストリート（映画）

ミヌエットとラグドールにアテンドされるI。

ミヌエット「まるで」

ラグドール「まるで、夢のなかで夢みてるみたいになっちゃう！」

ミヌエット「それ」

Iは二人のキャピキャピとしたノリには閉口の様子で、くさすように、

I「ハイテク仮想空間なんて言いながら中身は時代劇だな」

ミヌエット「失礼な！こんなに感触があるの、すごいんだよ」

ラグドール「物理演算っていうの！」

ミヌエット「触れる！」

ラグドール「つかめる！」

ミヌエット「撫でれる！」  
ラグドール「抱き合える！」

互いになでたり抱き合ったりする二人。

I「セックスは？」

二人、そんな下品な質問は今までに聞いたこともないという様子で、Iを非難して騒ぎ出す。

I「悪かったよ！でも普通気になるだろ」

二人、全然騒ぎやまず、猫のようにIを威嚇してくる。

I「うるせえ、しずまれ！！！」

と、路地からヴェドラとパンが突然飛び出してきて、Iを取り囲む。

どうしようかと一瞬悩んで、

パン「ごといこう、ごと」

ヴェドラ「ごとつすね！」

I「おい、ちよ、ま」

パンとヴェドラ、Iをまるごとかつぎあげて拉致し、そのまま走り去る。

ラグドール「え、え、え」

ミヌエット「えええ、セキュリティ」

ラグドール「電話どこ」

びつくりしたミヌエットとラグドール、電話を探しに行く。

2-5〇アジトへ（映画）

パンとヴェドラ、Iを運んでくる。

I「だれだてめえら、こら」

ヴェドラ「だめだやっぱり最初からになってますよこいつ」

パン「くそが」

パン、Iを乱暴に落とす。

I「だれだつってんだよ」

パン、近くの壁をさして、

パン「ここにはいるぞ」

I「はいるって？」

パン「この壁には隙間がある。負荷をかけて抜けるんだ、覚える」

パン、足踏みをしたり、その場で回ったり、筋トレのようなことをしたり、

謎の一連の動きをして、空間の隙間に入っていく。

Iはヴェドラと一緒に、見様見真似で同じ動きをする。

Iは首尾よく隙間にはっていくが、ヴェドラのほうがはいれない。

日陰に向かって叫ぶヴェドラ。

ヴェドラ「兄貴」

パン「なんでお前がはいれねえんだよふざけんなよ」

パン、戻ってきて、一緒に一連の動きをしてやる。

二人が動きで壁抜けを試みている間に、舞台の奥にまた、映画の外の二人が通りかかる。

2・6 ●散歩(2004年夏)

男と女、連れだつて歩いている。

足取りは慎重だが、先ほどとはうって変わってうれしそうな様子が伝わってくる。

男、女の足元をみて、

男「ここ、段差ある、小さいけど！」

女「分かってるよ」

男「転んだらどうするの」

女「大丈夫だつて」

男、女を気遣いながら、喜びを抑えられない様子で、

男「次の週末買い物に行こう。用意するものがたくさんあるだろ、それに名前も決めなきゃ」

女「そんなに焦ったらお楽しみが減るでしょ」

女、ゆつくりとついていく。

2-7 ○日陰のテロリスト(映画)

日陰のアジトに到着した3人。

二人は、Iに名を名乗る。

パン「パン・イ・セボジャ。パンでいい」

ヴェドラ「キー・ヴィヴラ・ヴェドラ。ヴェドラで、いいぜ」

I「ああ、俺は」

二人、先回りして声をそろえ、

パン・ヴェドラ「I」

I「はあ？」

Iは訳が分からないという様子。

二人、ため息をついて、

パン「おやじを連れてくる。待ってる」

ヴェドラ「おやじ！ おやじ！ 未来の大統領」

I「おい、いったいなんだってんだ」

パンとヴェドラ、大統領をつれてくるために退出。

いつのまにかヤマダがいる。I、気づいて、

I「うわ」

ヤマダ「こんにちは」

ヤマダのしゃべりは、人間の発話を限界まで引き延ばしたようにスローである。

I「・・・」

ヤマダ「おめにかかれて こうえい です」

彼はこれだけの言葉を言うためにも、かなりの時間を要する。

I「次から次へと」

Iは呆れながら、ヤマダとの握手に応じる。

大統領、パンにかつがれながら登場。

大統領「彼はヤマダ氏。日本のテロリストだ」



ヤマダ「むかしのはなしです」

大統領は、ヴェドラの背中に移動しながら、

大統領「I、お前も日本国籍だろ」

ヤマダ「いやあ、こんなところ、どうきょうのひとにあえるとは」

I、ヤマダがしゃべり終わるのをまたずに、

I「なんだお前、赤ちゃんかなんかか？」

大統領「君には礼を言いたい。君の働きは空間の日陰から見守っていた。おかげで電子人形の疑いの強い一体を特定できた」

I「電子人形？」

パン「そういうのがいるんだ。人間じゃないやつ」

I「それを特定したのか？」

ヴェドラ「お前のおかげなんだよ、そういうことがあったんだよ！」

パン「いいか、お前は記憶をフレッシユされている。ここじゃよくあることだ。ちょっと具合が悪くなるとすぐまるごと巻き戻すんだから」

ヴェドラ「俺たちは日陰にいたからフレッシユされてないんだ。あ、日陰ってのはこのことな」

ここでやっと、ヤマダの「いやあこんなところで同郷のひとにあえるとは」

というセリフが終わろうとしている。Iは、自分に話しかけられているのは分かるものの、大部分聞いていなかったため、

I「(ヤマダのセリフが終わったら)え？」

パン「ヤマダ氏はお前にあえて嬉しいそうだ」

ヤマダ「わたしは、ぼうめい、しゃ、です」

I「亡命者？」

大統領「ヤマダ氏は、フィクション香港の歴史のほぼ最初からここに暮らしている」

I「最初から・・・」

大統領「現実では国際指名手配されてな、そんな彼が活動を移したのがここだったのだ」  
ヤマダ「さいしょのころ、なんて、いまとは、くらべものに、ならない」

I、一応の興味をしめし、手帳に書きつけながらヤマダの話聞く。

ヴェドラ「(得意げにヤマダの話を要約して)今とはくらべものにならないって」

I「ああ」

ヤマダ「おんせいもなし」

I「え、音声がない？」

パン「文字だけ、文字だけ」

大統領「文字(ができて) 音声(ができて) 画像(ができた)」

ライスボール氏、盆を持ってくる。

ライスボール「今日の分です」

ライスボール氏、盆にかけられていた布をはぐ。

おにぎりが乗っている。

それを見たヤマダは感激の様子で、

ヤマダ「がしつ、よ！！！！！！(画質が良い、の意)」

I「おにぎり・・・？」

ライスボール氏「はじめまして。ライスボールです」

I「おにぎりだろ」

ライスボール「これはおにぎりですが、今のは自己紹介です」

ヤマダ「わたしの びじねす ばーとなー です」

ヤマダのセリフの言い切りを全然またず、ライスボールは自分で自己紹介する。

ライスボール「私はライスボール、ヤマダ氏のパートナーです」

I「ライスボールさん・・・」

ライスボール「ええ。れっきとしたフィクショナル香港市民です。みなさんみたいに活動家じゃないですよ、ヤマダ氏におにぎりを毎日届ける、それが私の仕事つだけ」

ライスボールは自分の仕事に誇りと愛を持っているようだ。

パン「あんたがいるんで助かってるよ、ライスボールさん」

ライスボール「うふふ」

このあたりでヤマダの「私のビジネスパートナーです」というセリフが終わり、おにぎりの画質に改めて言及する。

ヤマダ「きょうの がしつ はいいい なあ!!!」

ライスボール、ヤマダの言い切りを待たずに、

ライスボール「今日のおにぎりの画質は良かったみたいですね」

I「画質・・・日によって違うのか？」

大統領「今日はこちら最近では一番画質がいいのでは」

I「おにぎりだけ画質が変わるのか？」

パン「おにぎりなんて手抜きなもんだよ、おにぎりまで画質がいいんだったら、今日は全体的に高画質なんだなーってことだ」

ヤマダ、おにぎりを食べる。

ヤマダ「むむっ みしつ はいまいち!!」

I「みしつ？」

ヤマダ「あじの しつ です よ まだまだ なんだよ なあほんとに・・・」

ライスボール、ヤマダと同時に話し出し、実質的には代わりにこたえる。

ライスボール「味の質です」

大統領「やはり現実には及びませんか」

ライスボール「ヤマダ氏の肉体のほうは、もとの組織の人たちが管理していたのですが、徐々に老化してきてしまい、四肢を切断し、内臓を取り除き、いまでは、向こうに残ってるのは頭だけなんです」

I「なんだって」

ライスボール「だからヤマダ氏は、もう現実に帰ることはできません」

I「えー」

パン「頭だけで目が覚めてもしようがねえだろ」

ヴェドドラ「かわいそうだよな」

ライスボール「彼、ちよっとおしやべりが遅いでしょう？」

I「ああ」

ライスボール「アップロード中なんです」

I「アップロード？」

大統領「I、お前は独立国家の三要素を知ってるか？」

I「主権、国土、国民だ」

パン「そうだ。フィクショナル香港独立の暁にはうちのおやじが統治する。これが主権」  
ヴェドラ「この仮想空間が国土になる」

大統領「各国から秘密裏に言い渡されたのだ。あとは本当にここだけで暮らす、国民が最低一人いれば、国家としての独立を認めると。そこで我々はヤマダ氏の全人格を、この街にアップロードしようと試みている、アップロードが完了すれば、もう現実の頭すらいらない。彼は、真正正銘のこのフィクショナル香港の国民になるのだ」

ヤマダ「おひとついかがです か ちよっと むかしばなし でも きいて ください」

ヤマダはIにおにぎりをすすめようとするが、大統領はそのセリフを重ねて話をすすめている。

大統領「しかしこのアップロードには、もう10年もかかっている」

I「10年もこの状態で？」

大統領「この町全体の情報量が重すぎるのだ。近いうちに、ヤマダ氏の脳の寿命が尽きてしまう」

I「死んじやうのか!？」

大統領「急がねばならない。いまから電子人形を破壊しに行く」

I「電子人形・・・」

大統領「この町の情報量を少しでも軽くするのだ。行くぞ！」

大統領、パンを馬のように乗りこなして、出ていく。ヴェドラも続く。

I「あ、おい」

ヤマダの「ちよっと昔話でも、聞いてください」というセリフが、やっと終わろうとしている。

Iは、このロースピードで展開されるらしい昔話に明らかに恐れをなしているが、ライスボールとヤマダはにこにこIにせまっていく。

2・80バー「ブルーハウス」(映画)

いつものように紹興酒を飲んでいる占い師のところに、娘がやってくる。

占い師「金は持ってきたのかい？」

娘「はい」

娘が持ってきた金をテーブルに置くと、すぐにマスターが回収する。

占い師「ああ、ちよっと」

マスター「ツケのぶん回収しとくよ」

占い師、悔しそうである。

娘「じゃあお願いします」

占い師「なにが知りたいんだい」

娘「パパがしあわせかどうか」

占い師「じゃあ息をとめな」

娘は息をとめ、占い師はその鼻や口を見ている。

せいろと、さきほどIから受け取った赤い手帳を持ったUが来店する。

焦った様子。

マスター「いらっしやい、かわいいこちゃん」

U「あ、マスター。私のこと覚えてない？」  
マスター「いいや、もし会ってたらこんなにかわいい子は覚えてるよ」

U、占い師にも話しかけに行く。

U「ねえ、あんたはあたしのこと・・・」

占い師「なんだい、あんたも占いかい？」

U「もう私のこと占ってたよ、忘れちゃった？」

占い師「そうだったけ？」

U「やっぱり、巻き戻ってる・・・。もー、こんなんやってたら、だれに食べさせたかわかんなくなっちゃう！」

ラグドール・ミヌエットが来店する。

ラグドール「マスター、電話かして」

マスター「おう、奥にあるよ」

二人、奥へ消えていく。

U「（それを見ながら）あの子たち、たしかどっちかしか食べてない・・・（占い師を見て）あ」

占い師「はいおわり」

娘、止めていた呼吸を再開して、ぶはつとなる。

娘「どうだった？」

占い師「さっぱり分かんらん」

娘「ええ！？」

占い師「だってパパのことは、パパをみないとわからないじゃないか」

娘「じゃあ最初から言っちゃってよ」

占い師「バカなお前が悪いんだよ」

娘「お金返して！」

占い師「やだね」

娘「ケチ！」

占い師「お前のことはぜーんぶわかったよ。この病気持ち！ 山ほど病気をもつてやがる。病気持ちの役立たずのガキ！」

娘、大声で泣き出す。

マスター「おい、なに泣かしてんだ」

占い師「知らないよ！」

娘、泣きながら店を出ていく。

娘「パパに言いつけるから！」

U「あ、ねえ」

U、追っていく。

去り際に占い師にマントウを押し付けて、

U「占い師さんこれ、あげる。食べてね」

占い師「んあー？」

マスター、Uが去っていったのをみて、

マスター「来たと思ったら行ってしまった。風のような、お嬢ちゃんだったねえ」

占い師、マントウのおいをかぎ、捨てる。

占い師「くっさ」

マスター「おい！」

2・9 ●自宅（2004年冬）

男が段ボールになにか詰めている。女が来て、

女「なにしてるの」

男「しまってるんだよ」

女「なんで」

女の言葉は非常にとげとげしい。

男「なんでって」

女、段ボールを蹴とばす。

段ボールの中身が散乱する。ベビー服や、おむつなど。

男、その光景に一瞬ひるむが、自分を抑えて、散らばったそれらを拾い、また黙って段ボールにしまい始める。

女「なんでしまうの！」

男、慎重に答える。

男「もういつかい、来てくれたときのために」

女、段ボール持ち上げ、ひっくり返す。中身が散乱する。

男も悲痛に声を荒げて、

男「やめろよ！ 君ばかり、悲しいわけじゃないだろ！」

女もそれ以上に取り乱して、

女「そもそもなんでこんなに買ったのよ、こんな準備したって仕方ないのに！ いやがらせみたい、こんなの！ こんなの！」

段ボールの中身を次々に男に投げつける。

男「やめろって！」

女、段ボールに突っ伏して、手が付けられないような大声で泣き始める。

男、呆然とそれを眺める。

ヤマダが、とても楽しそうに、もちろんスローに、登場。

ヤマダ「まず が できた つぎ に おと が き ました」

暗転

2・10 ●節電の東京（2011年）+ヤマダのむかしばなし（映画）

急に暗くなったことに、女は驚いて、

女「あ！」

ヤマダ「こえ が きこえる」

ヤマダのセリフが続く中、女は家の奥に声をかける。

女「ねえ、ねえ」

男がそれに答える。

男「なに」

女「なんか、停電」

男「だから言ったじゃん、停電だって」

女「なにが」

男「計画停電」  
女「忘れてた」

男、懐中電灯を持つてくる

ヤマダ「こんな うれしい ことは ない」

ヤマダのセリフが続く中、男女、暗闇に耳をすませる。

男「どつちが鳴いてる？」

女、寝ている小さな生き物を見つけたようで、

女「らぐは寝てる」

男「みーちゃんか」

女「みーちゃん、どこにいるの」

二人、鳴いているほうの猫を探し始める。

男「隠れちゃったかな・・・あ、砂」

女「え？」

男、いらいらと、

男「みーとらぐの砂！ 交換しといてって言ったのに。停電のまえに」

女、それを上回るようにいらいらして、

女「自分でやればよかったでしょ」

ヤマダ「こころの なか で むかしの うた を うたって いる」

男、ため息。

女「ため息やめてよ」

男「いらいらしてるの自分でしょ」

猫を探しているふたり、ぶつかると。

女「いたい」

男「ぶつかってきたのそっちだろ」

女、ため息。

男「計画停電、実際ぜんぜんやってないらしいよ、なんでうちの地域だけ、はあ・・・」

女「こんな、たいへんなときに。私たち自分のことばかり」

男女、のろのろと、もう一匹の猫を探し続ける。

男「みーちゃん、みーちゃん・・・」

ヤマダ、岡林信康の「友よ」の一節を、これも、これ以上ないほどゆっくり

と歌う。

その歌詞にあわせるように、ゆっくりと、夜明けのように明るくなると、舞

台上にはもう誰もいない。

2・11〇オーシャンパーク（映画）

パン、ヴェドラ、大統領が登場。

大統領は肩車の形でパンに乗っている。ヴェドラ、はしゃいでいる。

ヴェドラ「おやじ！ おやじ！ 未来の大統領！」

パン「おい、このへんだろ」

ヴェドラ「へい、あのガキいつもこのオーシャンパークのあたりで遊んでますぜ」

大統領「ひさびさに、日向に出た。虚構の世界ではあるが、外はそれなりに気が晴れる」

大統領、うれしそうにキャツキャツと笑う。

娘が泣きながら登場。

U、娘に追いついて、

U「大丈夫？」

娘「平気、泣いたふりだもん」

娘、よく見ると泣いていない。

U「そうなの」

娘「だってあのおばちゃんいじわるだから、悪者にしたかったの」

U「そう」

せいろからマントウを取り出しながら、

U「あのね、これを食べてほしくて」

大統領、すどく声をかける。

大統領「そのでかいガギをこっちによこしな」

U「なにをするの、あなたたちだれ」

パン「どかないとあんたも痛い目に会うぜ！」

U「ちよっと待ってよ」

大統領「やれ」

ヴェドドラ「へい！」

娘「うわあああん、パパーー！」

娘が父に助けを求めて泣く。泣いてはいないかもしれない。

ヴェドドラがUに襲い掛かり、Uはせいろで応戦。

互角の戦いが繰り広げられる。

パン「なんで互角なんだ！ なさけないぞ」

U、せいろをとり落とし、マントウが転がる。

I（ヤマダの体）が登場。赤い手帳はちゃんと持っている。

I「おい、ぶっそうじゃねえか」

ヴェドドラ「ええ！？」

パン「ヤマダ氏、いったいどうして外に」

第五番に動揺が広がるが、

大統領「違う！！ お前、Iだな。なんでここにきた」

I「昔話が長いんだよ、あのおっさん。それでつい」

I、コーデイネイトチェンジをしたことをにおわせる手振り。

U「I？」

I「君は・・・どこかで会ったことあるか？」

IとU、見つめ合う。IはUの記憶も失っているはずだが。

そのすきに、娘が逃げようとする。

大統領「おい、逃がすな」

ヴェドドラ、娘を取り押さえる。

U「どうするつもりなの！」

パン「ぶっ壊す」

パン、娘の頭をわしづかみにする。

ヴェドドラ「おやじもパンの兄貴も拳法の達人なんだ！ 押すと死んじゃう八個のツボって

のがあるんだぜ」

U「その子はまだ死なないはずよ！」

大統領「いいや壊せる、こいつは電子人形だ」

U「その子が、電子人形!?」

大統領「いたずらにこの街を重くする害悪」

U、一人納得したように、

U「・・・だから、マントウを食べなかつたんだ」

I「え?」

大統領「I、お前には説明しただろう。会ったばかりのその女と我々どちらの肩を持つ?」

大統領、ことさらに赤ちゃんらしい態度で哀れさ演出している。

I、見比べて、大統領のほうへ近づいていく。

I「一目見て分かつた」

身をひるがえして、Uに、

I「君が主人公だ」

娘を奪還してUのほうに渡す。

I「(娘に) おいで」

大統領、翻弄されたことに激怒しているのか、大声で、

大統領「まとめて取り押さえろ！」

ヴェドラ「きええええええ」

襲い掛かるヴェドラ。

I「待て！」

I、パンにコマンド入力して、

※コーディネイトチェンジ※Iとパン※

パン「おい！」

ヴェドラ「覚悟しろ！」

ヴェドラは、パン(ヤマダの体)を羽交い絞めにする。

パン「違う、俺がパンだ」

娘「なに、なに、なに」

娘も混乱している。

大統領「んああああ」

一方のIも、パンの体になった結果、乗っている大統領が暴れるので、さら

にヴェドラに向かってコマンド入力。

※コーディネイトチェンジ※Iとヴェドラ※

ヴェドラ「わああ」

I(ヴェドラの体)、Uと娘を連れて逃げていく

残されたのは、大統領をのせたヴェドラ(体はパン)、パン(体はヤマダ)。

パン「(逃げていくIに) おい、ヴェドラ！」

ヴェドラ「あ、ヴェドラは、俺っす。うわあ、変な感じっす」

パン「くそ、めちゃくちゃやりやがって。追いますか?」

大統領「もういい」

パン「え?」

大統領「いいことを聞いた。見分け方が分かつた」

大統領、顎をしゃくって、パンにせいろを拾わせる。



大統領「電子人形はマントウを食べない」  
第五番、立ち去る。

2-12 ○ヒッチハイク（映画）

I と U と娘、走りながら、

U 「これ。あんたが、前回書いてたやつ」

U、手帳を差し出す。

I 「俺の手帳」

U 「中身は消えてない。返すね」

I は受け取る。I の持つ手帳は二冊になる。

U は手を挙げてタクシーを呼ぶ。

U 「タクシー！！！」

車の停まる音。

マスターが車から降りてくる。

マスター「へへ、タクシーじゃねえけど止まっちゃまった。俺っていうのはどうしてこう女の子にあまいのか」

三人、マスターに詰め寄って、

I 「乗せてくれ」

マスター「なんだ男連れか」

U 「この子のうちまで、おねがい！」

マスター「君たちはいいけど、男はのせられないぜ」

I、マスターに向かってコマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※ I とマスター※

マスター「え？」

I 「いくぞ」

U 「住所言える？」

娘「ヴィクトリアピーク」

I（マスターの体）とUと娘、車に乗り込む。  
出発。

マスター「俺の車〜！」

ヴェドラの体となったマスターは取り残される。

2-13 ○キャットストリート（映画）

ミヌエットとラグドール、笑いながら登場。

ミヌエット「あれ、なんで笑ってたんだっけ、うちら」

ラグドール「忘れちゃった！」

二人、また笑う。

ヴェドラ（パンの体）が登場。にこにこせいろを差し出す。

ヴェドラ「お姉さんたち、マントウはいりませんか」

ミヌエット「マントウ？」

ヴェドラ「タダでいいよ、もうすぐお祭りだから」

ミヌエット「やったー、ください」

ラグドールは鼻をおさえて嫌がっている。

ラグドール「うちはいいや」

ミヌエツト「え、そうー？」

ヴェドラ「おいしいよ」

ラグドール「いやあ」

ヴェドラ「いらない？」

ヴェドラ、マントウをもって、ラグドールに押し付けるようにする。

ラグドール「ちよっと！」

ヴェドラさらにラグドールにせまっていく。

ヴェドラ「食えないのか？」

ラグドール「やめて」

ミヌエツト「ちよっとなにをするの」

ヴェドラ「食ってみろ」

ラグドール「やめて！ くさい！」

パン（ヤマダの体）に乗った大統領が出てくる。

大統領「見つけた」

パンがラグドールの頭をつかみ、大統領は彼女の顔面に八不打を打つ。

ミヌエツトが悲鳴をあげる。

ラグドールが倒れると、あたりに衝撃音が響きわたり、第五番たちも驚いた様

子。電子構造が崩れていくような、大きな音。

## 2・14 ●自宅（2020年）

男が座っている。ひぎに、なにかちいさな生き物に乗せて、手を添えている。

女、マスク姿で帰宅する。

男はひぎのうえのものに声をかける。

男「ラグ、ママ帰ってきたよ」

女、よろよろと寄ってきて、男の近くに座り込む。

女「ラグ・・・ごめんね、ママ遅かったね」

男「しょうがない、仕事なんだから」

短い沈黙。

女「・・・なんでLINEしてきたの」

男「え？だって」

女「いま死んじゃったって」

男「それは、するだろ」

女「駅から走ったのに。LINEみて、足が動かなくて」

男「帰ってきて間に合わなかったってわかるほうが」

女、泣きながら、

女「そのほうがいいよ、最後まで間に合うかもって思ったかったのに！ なんて知らせる

の」

男も声を荒げて、

男「言ってることめちゃくちゃだ。こんなときに」

女、マスクをとって、

女「もう病院やめる」

男「は？」

女「みんな、いま家にいるのに、なんで私だけ」

男「急に、そんなこと」

女「いいよだれが困っても。どうせ自分のことしか考えられないんだから」

2・15〇ヴィクトリアピーク（映画）

車をおりてきた三人。

U「いい景色だねえ」

I「見晴らし最高だ」

娘「まあね」

娘は得意げである。

I「なあお前、電子人形なのか？」

娘「うーん・・・うん」

U「自分でもそう思ってるの？」

娘「だってリリー子供なのに、体はでっかいのおかしいでしょ」

U「・・・うん」

I、手帳を見て読み上げるように、

I「この街に、成長はない。だから子供はいないんだ」

娘「リリーは病気で死んじゃったの。生きてたときの思い出を集めて、いまのリリーに入れなおしたの」

セキュリテイが登場。

娘「パパ！」

娘、うれしそうに駆けよっていく。

セキュリテイ「どうもどうも」

I、口笛を吹いて、

I「あんたいいとこ住んでんな」

セキュリテイ「まあ、せっかく香港に住むならね」

U「ちなみに、あんたあてに通報があったはずよ」

セキュリテイの頭のパトランプが点滅している。

セキュリテイ「知ってるよ、けど自分の娘のほうが大事だからね」

セキュリテイ、自分でパトランプを消す。

娘「えへへ」

U「そう・・・」

セキュリテイ「帰るよ」

娘「はあい」

セキュリテイたちが去りかけるところに、

U「リリーちゃん、いま幸せ？」

娘はきよとんととして、

娘「しあわせではないよ」

U「え」

娘「リリーは、しあわせとかはないよ」

セキュリティは気にした風もなく、  
セキュリティ「そんなことないだろー」

セキュリティと娘、立ち去る。

I、手帳を示して、

I「これは確かに、俺が書いたもんだ」

U「私の物語なんでしょ」

I「そうさ。もっと君のことが知りたい。スパイなんだろ？」

U「え？」

I「前回の俺が書いてる。君の雇い主はたぶん、日本の企業だ」

U「どうしてそこまで」

I「俺たちの間には、自動翻訳がはいってない」

U、少し笑って、

U「お見通しね・・・」

少し真剣な調子になり、

U「IBMが悪いのよ、何度もフレッシュして、市民たちの記憶を消して、ここに閉じ込めてる」

I「ああ」

U「市民たちを解放して、このフィクションナル香港の街を、丸ごとクライアントに渡すのが、私のビジネス」

I「市民たちはどうしたら解放できる？」

U「私のマントウ。あれを食べると、ここから出られるからだになる」

I「ここから出られるからだってのは？」

U「それは、つまり・・・」

U、ふと不思議な顔をして、

U「なんであなたには、こんなに正直にしゃべっちゃうんだろう」

遠くで何かが光ったようだ。

I「あそこ、なんか、光った・・・？」

U「燃えてる、火事だ！」

2-16 ○フレッシュ(映画)

衝撃音が低く続いている。

さきほどのまま、倒れているラグドール。

そこに補佐官が来ている。

ミヌエットが泣きながら、ほとんどパニック状態で説明する、  
ラグドールが殺されたの！ そしたら屋根が落ちてきて、そのあたりのお店  
がばたん、ばたんって」

占い師が焼け出されたような体で、はいずってくる。

占い師「どうなってんのよおお！」

・第五番の人々

別の場所。破壊された街を眺める第五番たち。

ヴェドラ「どうなってらんんすか」

大統領「おそらく、電子人形はこの街そのものとながっている。それで一部空間ごと損傷したんだ」

パン「じゃあこのままぶっ壊し続けたら」

大統領「かなりの情報量が削減できる！」

第五番のメンバーは希望に満ちている。

ヴェドラ「おやじ！ おやじ！ 未来の大統領！」

大統領「未来はそう遠くはない！」

・UとI

遠い火事を見ながら、U、つぶやくように、

U「フレッシユ・・・」

I「え？」

U「こうなったらたぶんやり直す、IBMはいつもそうする」

・キヤットストリート

ミヌエットが半狂乱でラグドールに取りすがり、訴える。

ミヌエット「ラグドールを返して〜！」

補佐官「落ち着け、そんな人形すぐにもとに戻る」

補佐官、やり直そうとしている。

またみえないシャッターに手をかけ、

補佐官「便利なもんだが、つかれるんだよなあ」

さびたシャッターを降ろそうとするときの、前回のフレッシユのときと同じ嫌な音がする。

・ヴィクトリアピーク

娘とセキュリティが、ヴィクトリアピークの自宅前から街を見下ろしている。

セキュリティはマントウを食べている。

娘「見て、あちこち燃えて、夕方みたい」

セキュリティ「そうだねえ」

・第五番

異音に気が付いて、

ヴェドラ「なんだ？」

パン「フレッシユされる、くるぞ」

大統領「日陰に隠れろ！」

3人、必死に壁に向かって一連の動作をする。

大統領を地面に降ろすことができないので、やりにくそうである。

・UとI

U「日陰への入りかた、分かる？」

I「いいや。どうやら、前回の俺は知ってたみたいだが（手帳をパラパラとめくって）」

U、ややさみしそうに、

U「じゃあんたまた、私のこと忘れちゃうね」

I「また思い出せばいい。これを君にあずける」  
手帳を二冊とも渡す。

Uは走って去っていかうとするが、ふと振り向いて、

U「私があんたの主人公ってどういう意味？」

I「想像力の源ってことさ。君を見つめるとまるで・・・」

U、空間の隙間へ、日陰へと消えていく。  
I「未来が見えるようだ」

#### ・第五番

パンと大統領は日陰に隠れられたようだ。

しかし、ヴェドラは入れずに、取り残されている。うろたえながら、  
ヴェドラ「兄貴く！兄貴く！」

#### 音楽※※フレッシユ※※

前回のフレッシユのときと同じ、不安定な音色。

ヴェドラやIを含め、場に出ていた人は一度倒れ、人形のように去っていく。

#### 3・1 ●自宅（2024年）

パネルの向こうで、女がスマホで通話をしている様子が見える。

女「いえ・・・すっかり落ち着きました。とんでもないです。生前は父がお世話になりました。わざわざありがとうございます。はい。失礼いたします」

男もスマホをいじっている。

女が近くに来ると、顔もみずに声をかける。

男「ミヌエット、死んじゃったって」

女「え？ うん」

男「いや、女優さん。フィクショナル香港の」

女「ああ」

男「まだ60だって」

女、男とは離れたところに腰かけ、しんみりと、

女「みんな死んじゃうね」

短い沈黙。

男「仕事、やめてきた」

女、少し驚き、

女「定年まで、まだあるでしょ」

男「やめてくれて言われたんだ」

女「メタバース、調子いいんじゃないの」

男「それだけライバルが多い、フォートナイト、原神、FF14。人気がないメタバースなんてユーザー不足でガラガラだ。現実には生きる人々をワクワクさせるような、そういうアイデアを僕はだせなかった。想像力がないんだ」

女、少しだけ笑って、

女「なんにもなくなっちゃったね。私たち」

男「もう、生きてる意味がないな」

女「なんだか、もうこの世に未練がないみたい」

男女、それぞれの方向へ去っていく。

男「2024年、僕たちの未来には、なにもない」

女「私たちの人生は、取り返しがつかない」

### 電子音声「フィクションナル香港IBM」

#### 3・2〇面接（映画）

仮想空間。夜。かすかに海の音。

またしても、1・2のシーンとまったく同じように補佐官とIがいる。体も、最初のIの体に戻っている。

補佐官は尻もちをついている。コーディネイトチェンジを繰り返されて、酔ってしまつたあとのようだ。

補佐官、息を整えて、恐れをなしたようにIを見て、

補佐官「はじめてだこんなことは。あなたは期待以上の人だ」

I「悪かったって」

補佐官「くれぐれも悪用しないように！」

I「OK」

とくに反省した様子もなくへらへらしているIに、補佐官はIBMの手帳を渡して、

補佐官「採用だ。フィクションナル香港にようこそ」

二人、握手。

手を握つたタイミングで、ミヌエットとラグドールが現れ、場面はキャットストリートへ。

#### 3・3〇キャットストリート（映画）

ミヌエットとラグドールにアテンドされているI、

I「ハイテク仮想空間なんて言いながら中身は時代劇だな」

ミヌエット「失礼な！こんなに感触があるの、すごいんだよ」

ラグドール「物理演算っていうの！」

ミヌエット「触れる！」

ラグドール「つかめる！」

ミヌエット「撫でれる！」

ラグドール「抱き合える！」

互いになでたり抱き合ったりする二人。

I「セックスは？」

ラグドール、そんな下品な質問は今までに聞いたこともないという様子で、

Iを非難して騒ぎ出す。

が、ミヌエットは、ラグドールを強く引き寄せる。

ラグドール「どうした？」

ミヌエット「ううん、なんか、ラグドールとくっついてたくて」

ラグドール「え？どうして？」

ミヌエット「どうしてだろう、なんか怖い夢みたのかな」

ラグドール「フィクショナル香港では、夢はみないよ」

ミヌエット「そうだよ、なんだろう、忘れちゃった」

ミヌエットとラグドール、強くハグをする。

I「なんなんだよお前ら」

ヴェドラがとぼとぼと出てくる。

ヴェドラ「くっそ、寝覚めがわりいな」

まだ抱き合っているミヌエットたちとIを見つけて、

ヴェドラ「おい」

I「ん？」

ヴェドラ「あんたたちIBMのやつらだよな？」

I「まあ、そうだけど」

ヴェドラ「俺、なんかやらなきゃいけないことがあった気がするんだよ」

I「はあ？」

ヴェドラ「なにか知らないか？」

I「勘弁してくれ！ お前がだれかも知らねえよ」

ヴェドラ「いてもたってもいられないんだよ！ なあ！」

ヴェドラ、Iの首のあたりを持ってはげしくゆさぶる。

I「やめろ、やめろって」

ヴェドラ「うああああ」

I「おい、おまえら助ける」

ミヌエットとラグドールまだ抱き合っていて、

ラグドール「ねえ、たいへんIが襲われてる」

ミヌエット「ラグドール、私から離れないでね！」

ミヌエットはラグドールを離さない。

I「落ち着けて、おい！」

I、自分をゆさぶり続けるヴェドラにコマンド入力。

※**コーディネイトチェンジ**※Iとヴェドラ※

ヴェドラ「あれ？」

I「あんな」

ヴェドラ、目の前に自分の体があるのに激しく驚いて、

ヴェドラ「俺だ、俺がいる！ うわあああ本当に頭おかしくなっちゃったああああ」

ヴェドラ、全速力で逃げていく。

I「あ、おい俺の体のまま・・・」

壁の隙間から、Uが登場。

U「I！ 来て！」

I「あんたは・・・」

IにはUの記憶はないはずだが、

U「私を信じて！ 来て！」

落ちてしまっていた手帳を拾い、迷わずついていく。二人は去る。

ラグドール「ねえ、ミヌエット、なんかわけわかんないことになっちゃったよ」



ミスエット、混乱しているのか、泣いている。  
ラグドール「セキュリティに通報しに行かなきゃ、ねえ」

ラグドールがミスエットを引っ張る形で、はけていく。

### 3・4〇日陰（映画）

第五番のアジト。パンと大統領。

ヤマダのところに、ライスボールが盆に乗ったおにぎりを持ってくる。

おにぎりにかけていた布をとると、

ヤマダ「がしつ、いまいち！」

ライスボールはヤマダの言い切りを待たず、

ライスボール「あらー、いまいちですかあ」

大統領「昨日は画質がよかったですか？」

ヤマダ「ええ、ぜんぜん、ちがいますよ」

ライスボールはヤマダの発話と同時に話し始めている。

ライスボール「昨日、というのも定義が難しいですけど」

大統領「たしかに。フレッシュというのは時間間隔を狂わせる。ライスボール氏は記憶を保持されているんですね」

ライスボール「私はなるべくヤマダ氏といっしょに日陰にいますから」

このあたりでヤマダの前段のセリフがおわり、ヤマダはおにぎりを食べる。

苦渋の表情で、

ヤマダ「むむっ、みしつは、さいあく！」

ライスボール「ヤマダ氏、少しおしゃべりが早くなったと思いませんか？」

大統領「どうでしょう、私にはわかりませんが」

確かに少しだけ早くなっているのである。

ライスボール「アップロードが終わりかけているのかも！」

大統領「それはすばらしい」

ライスボール「ええ」

大統領「あとはヤマダ氏の脳との競争ですね」

ライスボール「ぜったいに間に合わせてください」

大統領「もちろん。さあ、パン・・・どうした？」

大統領を乗せているパンはさきほどから沈んだ態度である。

パン「あの、ヴェドラは」

大統領「仕方ない。あいつはフレッシュのとき日向にいた。もうなにも覚えちゃいないだろう」

パン「くそ、あのまぬけが！俺がもつとみてやれば」

大統領「気にするな。もとのフィクショナル香港市民にもどって気楽にやってるさ」

ライスボール「わたしももらっていたいですか」

ライスボールはヤマダにおにぎりをわけてもらう。

ヤマダ「もちろん、どうぞ」

ヤマダがどうぞしている間にも大統領は話をすすめる。

大統領「でかけるぞ。フレッシュされたから、電子人形はよみがえっているはずだ」  
パン「へい」

大統領「何度でもぶち壊してやる。そしてヤマダ氏のアップロードを終わらせ、独立を果たすのだ」

パンはせいろを持ち、大統領はパンに乗って、外へ出発する。

ライスボール「あぁ、わたしもあなたの役に立ちたいわ！」

### 3・5〇バー「ブルーハウス」(映画)

占い師が飲んでいる。

マスターが紹興酒を取り上げて、

マスター「のみすぎだよ」

占い師「じゃあここはなんのための場所だい！」

マスター「お代を払ってくれないと困るんだ」

占い師「代わりに占ってやろうか」

マスター「いやないよ」

占い師「息を止めな」

マスター、しぶしぶ息を止める。

UとIが来店。Iの今の体は、さきほどから引き続きヴェドラである。

Iが持っている手帳は三冊になっている。

Iはそれらを見比べながら、

I「つまり、俺は三回目の俺ってわけか」

U「そう」

I「で、その肝心のマントウとやらはどこだ」

U「とられちゃったの、私のせいろ」

店の外から歌が聞こえる。

「♪俺たちや陽気なマントウ売りさ〜」

U「隠れて！」

UとI、机のしたに隠れる。

占い師「分かったよ！」

マスター、ぶはっとなる。

占い師「あんたはねえ、女好きだ」

マスター「知ってるよ！あんた以外の女はみんな好きさ！」

パンに肩車された大統領が来店。

彼らはUのせいろを持っている。

パン「♪俺たちや陽気なマントウ売りさ〜」

大統領「マントウはいかがですか」

マスター「いくらだい」

パン「タダですよ、お祭りですから」

U、机の下から様子を見ていて、

U「私のマントウ！ どうしてあいつらが」

パン、マスターの鼻をつまむ。

マスターの口があいたすきに、大統領はマントウをつっこむ。

マスター「おい、やめろ・・・うまいな」

大統領「食ったな、あなたは？」

大統領たち、関心を占い師に移す。

占い師「いらぬいよ」

大統領「そう言わずに」

占い師「いらぬいって言ってるだろ」

マスターはマントウをほおぼりながらとめる。

マスター「あんたらいいかげんに」

大統領とパン、少し考える。

大統領「どうだろう」

パン「ただの酔っ払って気もしますが」

大統領「怪しいな」

マスター「注文しないなら帰ってくれ」

大統領「やってみよう」

パン「了解」

パン、占い師の頭をわしづかみにする。

占い師「ひやあああ、なんだいなんだい」

I「なにやってみよう」

机の下からIが飛び出してくる。

パン、その姿を見て動きが止まる。

パン「ヴェドラ？」

U「I、だめ」

パン「ヴェドラか？ お前こんなところで」

占い師の頭をつかんだまま、Iに歩み寄っていく。

大統領「だまされるなパン、こいつはIだ！」

マスター、そのすきにパンに体当たり。

パン「わ！」

パンは大きくよろけ、大統領がバランスを失って叫ぶ。

パンは占い師の頭を離し、マントウ入りのせいろが転がる。

マスター「出ていけ！」

パン、激昂して、

パン「やんのか、こら！！」

マスター「やってみろ、俺の女を出すな！」

大統領「待てパン、分が悪い、いったん退散だ！」

パン「・・・へい！」

第五番の二人、逃げていく。

大統領は赤ん坊のように悔し泣きし、その泣き声が遠ざかっていく。

IとU、散乱したマントウとせいろを拾う。

I「これだろ？」

U「そう、良かった」

I、吹き出して、

I「あいつら、目線が高いもんだから、ぜんぜん俺たちに気づかぬえの」

二人、笑う。

占い師「・・・だれがあんたの女だつて？」

マスター「一度言つてみたかっただけさ、そんなセリフを」

占い師「手を出しな」

占い師、紹興酒の瓶の蓋を、マスターの左手薬指にはめる。

マスター「なんだいこりゃあ」

占い師「左手の薬指、埋めてやったよ、喜びな」

マスター「天にも昇る思いだよ」

ライスボール、来店して、軽くひやかすように、

ライスボール「あら、おじゃまだった？」

マスター「いいや、ちつとも」

ライスボール「赤ワイン」

マスター「あいよ」

マスター、指の蓋はそのままにしてはけていく。

ライスボール「あら、占い師さん、今日はあんまり酔つてないの？」

占い師「もうべろべろだよ」

ライスボール「うそ、みてたわよ、さつきからずっと」

占い師「だからなんだつてんだい」

ライスボール、紹興酒の瓶で占い師の頭を思い切り殴る。

占い師、倒れる。

I「あ！」

U「なんてことを！」

ライスボール、そのまま走つて逃げていく。

あたりに衝撃音が響きわたる。

I「おい、くずれるぞ！」

U「逃げて！ 外に！」

U、Iから手帳をうばいとる。

マスターが占い師に駆け寄っている。

I「でも」

U「絶対にまた会えるから！」

I、店の外に逃げていく。

Uも壁のすきまへ、日陰へと逃げようとしているが、まだ占い師をかまってるマスターを見て、

マスター「おい、起きろ」

U「マスター大丈夫よ、その人は元に戻るから」

マスター「何言つてんだお前！」

マスター、占い師を抱き上げる。

マスター「おい、しっかりしろ！」

店が大きく崩れ、マスターは占い師を抱えたまま、頭部に衝撃を受けて倒れる。

Uはそれを苦し気に見届けつつ、日陰に逃げていく。  
補佐官が別の場所に出てきて、シャッターを閉める。

音楽※※フレッシュ※※

フレッシュのときの、不安定な音色。

動かなくなっていたマスターと古い師も、音楽に合わせ、人形のように去っていく。

3・6 ●どこか（2034年）

男女がはいってきて、

男「もっと早くに別々の道を歩んでいたなら、きつともっと、ましな未来があったはずだ」

女「それで？ ましな未来って何？」

男「そこなんだ、別れていたとして、それから君がどうしたのか、皆目わからない。僕には想像力がない」

彼らは、かなり年を重ねているはずだが、むしろ2024年よりも若々しいくらいの動作や発話である。

男女はまた、別々の方向へ去っていく。

電子音声「フィクショナル香港IBM」

3・7 ○面接しキャットストリート（映画）

九龍にて、補佐官はIに手帳を渡し、握手して去る。

Iはまた、最初の体に戻っている。

ミヌエットとラグドールが、キャットストリートでIをアテンドしている。

ラグドール「こんなに感触があるの、すごいんだよ」

ミヌエット「触れる！」

ラグドール「つかめる！」

ミヌエット「撫でれる！」

ラグドール「抱き合える！」

互いになでたり抱き合ったりする二人。

I「セックスは？」

ラグドール、そんな下品な質問は今までに聞いたこともないという様子で、

Iを非難して騒ぎ出す。

が、ミヌエットは、ラグドールを強く引き寄せせる。

ラグドール「どうした？」

ミヌエット、感極まって泣いている。

ミヌエット「ラグドールが、ここにいてよかった」

ミヌエットはラグドールを抱きしめる。

大統領がパンに乗って登場。ミヌエットとラグドールを見て、

大統領「まぎらわしいな、どっちだったか」

パン「たしかこっちですよ」

I「おいなんだてめえら」

パン、ラグドールの頭をつかむ。

ラグドールはやや持ち上げられてつま先立ちになり、絶叫する。

ラグドール「きゃあああ」

ミヌエツト「だれ！」

ラグドール「やめてえええ」

ミヌエツト「ラグドールをはなして！」

ミヌエツト、パンをポコポコと殴る。

パン「あれ、こっちだったけなあ」

大統領「そんな気もしてきた」

パン、ラグドールを乱暴に捨て、ミヌエツトの頭をつかむ。

ミヌエツト「いたあい！！」

うち捨てられたラグドールも、すぐにパンに立ち向かう。

ラグドール「やめて！ ミヌエツトをはなして！」

それをミヌエツト、強く制止して、

ミヌエツト「ラグドール、はなれて！」

ラグドール「だって！」

ミヌエツト、果敢な態度で大統領らを威嚇する。

ミヌエツト「なによあんたたち、痛めつけるならうちにしなさいよ！」

大統領「言ったな、試してみよう」

I「おいおまえらやめろ！」

大統領、ミヌエツトの顔面に八不打をうつ。

ミヌエツト、死ぬ。

ラグドール、呆然ととりすがって、

ラグドール「ミヌエツト？ ミヌエツト？」

I「お前ら・・・殺したのか？」

あたりは静寂。衝撃音は聞こえない。

パン「壊せた。あつてましたね」

大統領「いや、おかしい。街が壊れない。こいつが電子人形だしたら、街の躯体と同期

しているはずだ」

パン「でも一般市民だしたら、死は実装されてないはずですよ」

大統領「そうなんだが」

パン、ラグドールを指して、

パン「一応、こっちも試してみます？」

I「何する気だ」

パンと大統領、ラグドールによっていく。

ラグドールは呆然としたまま。

I「おい、あんた逃げろ」

ラグドール、呆然として首をふる。

パンは邪魔なIを軽く突き飛ばす。

パンはラグドールの頭をつかみ、大統領が八不打を打とうとして、

I「くそ、やめろって」

I、パンにコマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※パンとI※

パン「あ、あ、おまえ、やりやがったな」

大統領「あ、あ、あ」

I (体はパン)、自分に乗っている大統領をふり落とそうとする。

I「てめえ、おりろ！」

パン「やめろ、落とさないでくれ！」

今にも振り落とされそうな大統領に駆け寄り、パンは必死に支えようとする。もみあいのようなになるなか、ヴェドラがマントウを食べながら通りかかる。

ヴェドラ「・・・ん？」

パン「ヴェドラ！」

ヴェドラ「・・・だれだおまえ」

パン「ヴェドラ、助ける！」

大統領、いよいよ落ちそうになりながら、

大統領「無駄だ、そいつはもうヴェドラではない！」

パン「手を貸してくれ！ おやじが死んじゃう！！ 頼む！」

ヴェドラ、駆け寄って、二人で大統領を抱える。

パン「ありがとう、お前、もしかして覚えているのか？」

ヴェドラ「何言ってるんだ？ 困ってるひとがいたら親切にって、フィクション香港市民の義務だろ」

ヴェドラとパン、そのまま大統領を運んで敗走する。

Uが登場し、取り残されたIに、

U「I！ 来て！」

二人も去っていく。

### 3・8〇日陰 (映画)

ヤマダとライスボールが追いかけてっこをしている。

ライスボールの軽やかな動きと、ヤマダの緩慢な動き。

ヤマダ「まて〜」

ライスボール「うふふ、つかまえてみて」

ヤマダ「きみは、早いなあ」

ライスボール「やっぱり、どんどんしゃべるのが早くなってる！ もうすこしでつかまっちゃうしそう！」

あきらかに、ヤマダはしゃべるのも動きも早くなっている。

もちろん、普通の人よりは十分に遅い。

ライスボールは興奮のあまり、ヤマダに近づいたり遠ざかったりしながら、

ヤマダ「わはは」

ライスボール「あなた、がんばって、もう少し！」

### 3・9〇UとI (映画)

I (パンの体) が手帳を読んでいる。

I「四冊目」

U「つまり四回目のあんたってわけ！」

I、思索をめぐらし、

I 「気になることがある。IBMの社員は、この事態を知ってるはずだ」  
U 「ええ。やっかいなことになってるって、さすがに気づいてるはず」

I 「どうして毎回同じように、俺はコーディネイトチェンジができるんだろう」  
遠くで衝撃音。

U 「あ、また・・・どこかで、電子人形が死んだ」

別の場所に補佐官がやってきて、シャッターに手をかける。

U 「このままじゃ街が壊れちゃう」

I 「またもとに戻るんだろ」

U 「うん、電子人形は再生する、けど」

I 「けど？」

U 「一度出ていった人間は戻ってこれない。あのマントウにはそういうプログラムがはいってるの。永遠に出ていけるように」

I 「ここは電子人形だけの街になるってわけか」

U 「私のせいだね」

U 、つらそうだ。

I は手帳をすべてUに渡す。

U は、日陰に逃げていく。

I 、力強く、

I 「俺がいる。何度でも、俺がいるさ」

### 音楽※※フレッシュ※※

フレッシュのときの、不安定な音色。

動かなくなっていたミヌエットと、それに取りすがっていたラグドールも人形のように去っていく。

が、ここでミヌエットは永遠に去り、ラグドールは取り残されたように見える。

### 電子音声 「フィクショナル香港IBM」

I が補佐官から手帳をもらい、握手した様子が見える。

3・10〇キャットストリート(映画)

ミヌエットはいない。ラグドールだけがIをアテンドしている。

が、ラグドールはまだ、ミヌエットが去ったほうを見つめている。

I 「で、ここがどこだって？」

ラグドール 「キャットストリート・・・？」

I 「いったいここはいつからあるんだ？」

ラグドール 「・・・」

I はさすがに不審に思っ、

I 「おい、どうした？」

ラグドール 「わすれちゃった」

I 「はあ？ おまえIBMの社員じゃねえのかよ」

ラグドール 「わすれちゃった子がいるから、私が代わりに思い出すの。そういう風だった



はずなの、たしかにそんな気がするのに・・・」

ラグドール、Iを突き飛ばして、Iは尻もちをつく。

I「なんだったんだよ」

ラグドール、混乱したように泣きながら、どこかへ行ってしまう。

I「とんだガイドだな」

I、やれやれといった態度でついていく。

Uが空間の隙間から現れると、そこにはすでにIがおらず、戸惑っている。

と、そこに占い師が声をかけてくる。

占い師「ちよつとあんた」

U「占い師さん」

占い師「このへんで、紹興酒の飲める店を知らないかい？」

U「え、覚えてるの？」

占い師、イライラと、

占い師「たしか、このへんにあつたんだよ、どうなつてんだい！」

U「こんなに短いスパンでフレッシュして、いろんなところにガタが来てる。I！」

U、Iを探して駆けていく。

### 3・11〇日陰（映画）

ライスボールがおにぎりの盆を持ってくる。

布をはいで、おにぎりが見えると、ヤマダ、苦渋の表情で、

ヤマダ「画質、さいあく！」

ライスボール、喜ばしいようで、

ライスボール「今日は画質も最悪ですか。順調に電子人形を破壊しているらしいですから、街全体がゆらいでいるかもしれないですね」

ヤマダ「でも、いつもありがとうね」

ヤマダは加速している。

ライスボール、感激して、

ライスボール「どんだんおしゃべりが早くなつてる！ あなたと同じスピードで話せたら、どんなに嬉しいかしら！」

ヤマダ「きみも、一つどうだい？」

ライスボール「いただきます」

ライスボール、おにぎりをほおぼって、

ライスボール「ああ、日向のみんな、早く死んじゃえばいいのに」

### 3・12〇オーシャンパーク（映画）

ヴェドラ「見つけました！」

第五番の大統領、パン、ヴェドラが、セキュリティと娘を追いかけている。

セキュリティの警棒はヴェドラが持っている。奪われてしまったようだ。

と、娘、転んでしまう。

セキュリティそれをかばって、第五番に捕まり、電撃を受ける。

セキュリティ「リリー、逃げなさい！」

娘「パパ」

セキユリテイ「早く！ 走って！」

娘「でも」

セキユリテイ、電撃を受け続けている。

娘、逃げない。

セキユリテイ「おまえがいなかったら、パパは生きてる意味がなくなっちゃうんだから」

セキユリテイ、電撃を受けながらも、パンやヴェドラにまわりついて、必

死にとめている。

大統領「邪魔をするな！」

大統領、セキユリテイの顔面に八不打を打つ。

セキユリテイ、死ぬ。短い静寂。

大統領「おかしい」

パン「へい。そのガキが電子人形で、この父親は違ったはずだ」

大統領「街も壊れない。これは、もはやこう考えるしかない。この父親は市民だ。そして死んだ。この街にはいまや、死が実装されている」

娘、泣き始める。

娘「パパ」

ヴェドラ「一応この娘もやるとききますか？ パンさん」

パン「・・・兄貴でいいよ」

大統領「そうだな」。

I「待て！」

IとUが登場。

Iはライスボールの体である。

パン「ライスボール氏・・・？」

U「おいで！」

U、娘を自分のところへ誘導する。

I「この子をどうするつもりだ」

大統領「Iだな。ライスボール氏となにかあったか」

I「この女か？ 急に変な様子でつかかかってきやがって」

大統領「覚えているかは知らないが、私たちには崇高な目的がある。そのために電子人形を破壊する」

I「だめだ、やめろ」

U「こんな泣いてる女の子に、よくそんなひどいことできるわね！」

娘「ううん。泣いたふりだよ」

娘、たしかに泣いていない。

U「え？」

娘「パパ、死んじゃったんでしょ」

U「死んだっていうか」

娘「もともとパパがいた世界に、戻ったんでしょ」

U「そう」

娘「よかった。リリーはずっとそれがいいって思ってたよ」

娘、大統領のほうに寄っていく。

娘「怖い人たち、それじゃ、お願いします」

U「リリーちゃん」

娘「リリーはもう、いらぬから。やっといらなくなったから。ずっといらなくなりましたか  
ったから」

U「・・・」

娘「お願いします、怖いひとたち、お願いします！」

大統領「遠慮はしないぞ」

娘「あ、パパに新しい子供ができるか、占ってもらえばよかったあ！」

大統領、娘の顔面に八不打を打つ。

娘は倒れる。

衝撃音が響きわたる。

大統領「伏せろ！」

パン「おやじがいるんで伏せれません！」

ヴェドラ「おやじく、あ、兄貴く」

ヴェドラ、大統領とパンをかばう。

U「I！ こっち！」

UとI、逃げていく。

3・13〇対決（映画）

衝撃を耐えている第五番のところに、補佐官がやってくる。

補佐官「やはり、あなたでしたか」

大統領「久しぶりだな」

パンを一瞥し、

補佐官「いい馬をお召しで」

パン「失礼だな」

補佐官「革命家が殺し屋になり下りましたか」

大統領「殺してではない！ 電子人形は人間ではない」

補佐官「そういうことにしましょう。じゃ、これはどうです？」

補佐官、自分のループタイを外して、それをヴェドラに向け、銃のように撃つ。

銃声。ヴェドラ、死ぬ。

パン「あ、おい、ヴェドラ！」

大統領「死んだのか？」

補佐官、倒れたヴェドラの体を蹴って確かめる。

ヴェドラ、ぴくりとも動かない。

パン「おい、こいつはもともとフィクショナル香港市民だぞ、どうして」

補佐官「それはこっちがききたい。うちの市民に死を実装したな！」

補佐官、激しく声を荒げている。

大統領「私たちではない！」

補佐官、ループタイでパンを撃つ。

銃声。右足にあたったようだ。

パン「ぐうっ！」

大統領「あ、あ、あ」

パン、大きくバランスを崩すが、持ちこたえる。

補佐官「お前たちじゃないならだれだ」

補佐官、パンを撃つ。

銃声。左足にあたったようだ。

パン「うううう、おやじ・・・」

パン、なんとか立っている。

大統領「パン、大丈夫か」

パン「くそいてえだけです！」

大統領、励ますようにパンをバシバシと叩く。

補佐官「痛みは物理演算の成果です。我が街自慢の・・・」

補佐官、パンを撃つ。

銃声。胸にあたったようだ。うめき声が漏れる。

補佐官「しかしなぜお前は死なない。こいつと、」

補佐官、ヴェドドラを撃つ。

銃声。その体はモノのように衝撃を受け止めるだけである。

補佐官「違いはなんだ？」

またパンを撃つ。銃声。パンは苦痛の声を我慢できない。

大統領「やめろ、うつな」

補佐官「考えろ」

パンの胸を撃つ。銃声。

補佐官「なにか心当たりは？」

パン「おやじ、答える必要なんてない！」

大統領は必死で考えているようだ。

答えをせかすように、補佐官はパンを撃ち続ける。

右足に二発、左足に二発、胸に一発。

パンは立っていられず、両足ともに膝立ちになるが、大統領を落とさず、お

おとおおと雄たけびをあげながら、補佐官のほうにじり寄っていく。

補佐官は、もう目の前に来ているパンの額に狙いを定める。

大統領「女だ！ 黒髪の、Uという女が」

パン「おやじ！」

パンと、その上の大統領、がくがくと震えている。

補佐官「女だな。OK。用済みだ」

補佐官、パンの頬に平手打ち。

バランスをくずし、大統領は転げ落ちる。

パン「おやじ！！」

地面に落ちた大統領、目を見開いたまま、もう動かない。

補佐官「死んだんじゃないさ、この世界から永遠に立ち去っただけだ。もっとも、それを

普通は死と呼ぶのかもしれないが」

補佐官、立ち去る。

パン「おやじ・・・おやじ・・・未来の大統領」

パン、泣きながら大統領のほうへ這いずっていき、その目を閉じてやる。

3・14〇日陰くオーシャンパーク（映画）

ヤマダ氏が一人で歩いてくる。

ほとんど普通の人と同じような速度で、

ヤマダ「意識が加速していくのを感じる。昔のこともはっきりと思い出せる」

見渡して、

ヤマダ「遠い昔。日本の風景。まだ大学生だった私。あの頃、見た夢」

腰かけて、

ヤマダ「独りぼっちだ。誰かと話したい。肩を組みたい。歌いたい。今すぐに、誰かと……」

ヤマダ氏、停止する。

ライスボール（体はI）が戻ってくる。

ライスボール「ヤマダ氏、ただいま戻ったわ」

ライスボール、恥ずかしそうに、

ライスボール「こんな恰好でごめんなさいね、ちょっといざこざがあつて……すぐにおにぎりをにぎるわ、ヤマダ氏？」

ライスボール氏、動かないヤマダを、確かめるように触れる。

ヤマダ、触れられると、抜け殻のように頭をテーブルのほうにがくんと落とす。

ライスボール「ヤマダ氏……」

ライスボール、眺めて、

ライスボール「脳が、死んでしまったんだわ……」

ライスボール、ふところのマントウを出して、ほおぼりながら、

ライスボール「わたし、おにぎりなんてだーいいきらい！」

・オーシャンパーク

I（体は引き続きライスボール）とUが近づいていくと、先ほどの場所でパンがまだ倒れたまま呻いている。

パン「殺してくれ……頼む」

二人、マントウを出して、食べさせる。

パン、静かになる。

セキュリテイ、娘、ヴェドラ、大統領など、動かない人々を見て、

U「ごめんね……みんな……」

I「これでいいんだろ。君のビジネスは」

Uは泣いているようだ。

U「もう分からない……みんなはなればなれになってしまつて……」

I、Uの涙を手で拭って、

I「優しい女に、スパイは向いてないな」

別の場所に補佐官が来て、シャッターを閉めようとしている。

音で察したU、手帳をすべてもって空間の隙間へ。

音楽※※フレッシュ※※

フレッシュのときの、不安定な音色。

動かなくなっていたたくさんの人々、人形のように去っていく。

3・15 ●どこか(2046年)

男女がやってきて、

男「僕たちは、フィクショナル香港IBMという映画の、いったいなにが面白かったんだろう」

女「わからない」

彼らは年取った気配がまったくくない。また別々の方向に去っていく。

電子音声「フィクショナル香港IBM」

3・16 ○面接(映画)

仮想空間。夜。

1・2のシーンとまったく同じように補佐官とIがいる。

補佐官がコーデイネイトチェンジに酔って倒れるところだ。

I「おい、大丈夫かよ」

補佐官「酔った」

I「酔った？」

補佐官「ちよつと戻せ」

I「ん？」

補佐官「もとのコーデイネートに」

I「ああ」

I、コマンドを入力。

※コーデイネイトチェンジ※Iと補佐官※

補佐官、息を整えて、恐れをなしたようにIを見て、

補佐官「はじめてだこんなことは。あなたは期待以上の人だ」

I「悪かったって」

補佐官、なぜか笑っている。

I「なんだ」

補佐官、まだ笑っている。

補佐官「はじめてだこんなことはだつて……。はじめてだつて……。？」

補佐官の笑いは狂気的なレベルに達する。

I「おかしくなっちゃったのか？」

補佐官、すぐに切り替えて、いつもの穏やかな、慇懃無礼な調子で、

補佐官「未来が分かったら、素敵だと思いませんか？」

I「なんの話だ」

補佐官「こんなことしたら、お母さんは喜ぶかな。こんなことをしたらお父さんは怒るだろうか、あらかじめ結果が分かっていたら、それはどんなに価値があるでしょう」

I「とりあえず言ってる意味は分かるよ」

補佐官「いま、仮想空間は、ありふれています」

I「あなたがさつきいったような、銃をぶっぱなしたり、スーパースターになったりする、子供じみたやつのことだろ？」

補佐官「ええ。まさにあんなこといいな、できたらいいなの世界です」

補佐官の言い方にはやや節がついていて、あの名作を彷彿とさせる。

I「あれは素晴らしい古典だ」

補佐官「しかし、できたらいいなを実現したら、さまざまな不具合、予測不能なバグをまねくかもしれません。実際に人が生活したりビジネスを行っている空間では、そうした致命的な事態はそうそう起こせないのです。すると、どこかに、実験場が必要になる」

I「読めてきた、それがここだっていうんだな」

補佐官「ええ。多くのクライアントのために運営しており、莫大な利益を生んでいます」

I「そいつはけっこう」

補佐官、話しながらコマンド入力。

補佐官「コーデインイトチェンジを」

※コーデインイトチェンジ※Iと補佐官※

補佐官「あなたは、自力でできるようになった」

補佐官、話しながらコマンドを入力。

※コーデインイトチェンジ※Iと補佐官※

補佐官「つもりでいるでしょう」

I「・・・実験だったってわけか」

補佐官「しかし話がすっかり変わってしまった。もう取り返しがつかない。取り返しがつくことが、この町の最大の売りだったのに！」

U、よろよると、ほとんど這うようにやってくる。

補佐官「来ましたか。マントウ祭りのどさくさでまぎれこんだようですね、薄汚いねずみが」

U「街になにをしたの」

補佐官「私たちは被害者ですよ、街はだれにも渡さない」

U「だからって壊すの」

補佐官「あなたに言われる筋合いはない、どうしてくれる！」

補佐官、ループタイでUを打つ。

銃声。

Uは転がって避ける。

補佐官、悔しそうな雄たけびをあげながら、またUを狙う。

I「やめろ！」

I、補佐官にとびかかり、ループタイの狙いをそらす。

銃声。

補佐官「俺に、はむかってどうするつもりだ、I、お前は」

もみあいになり、銃声。

補佐官にあたってたようだ。倒れて、動かなくなる。

Uは呆然と補佐官を眺めて、

U「この人、いつのまに食べたんだろう」

I、補佐官のループタイを拾い上げて、

I「・・・子供じみた銃じゃねえか」

そのへんにポイと捨て、Uのほうを見る。

U「はじめまして」

I 「はじめまして」

もとの姿のIと会うのは、Uにとっても、初めてのことである。

U 「泳いできたの、あっちの、香港島から、九龍まで」

U、立ち上がろうとして、よろける。

I、それを支えながら、

I 「そりやすごい」

U 「・・・どうして信じて、味方になってくれたの？ この人死んじゃったよ？」

I、補佐官を一瞥して、

I 「まあ、そんなに思い入れのあるやつじゃないし・・・」

すぐに、Uに視線を戻す。Uから目がそらせないようだ。

Uのほうも、Iを見つめ続けている。

I 「逆に、君には思い入れがありそうだ」

U 「はじめて会うのにな？」

I 「はじめて会うのに。一目見て、分かった」

I、さらにUの目をのぞきこむ。

I 「君の瞳の中に、未来が見える」

U 「未来って何」

I 「可能性のことだよ。無限に、広がっていく」

3・17●どこか（2058年）

男女がやってきて、軽やかに。

男 「運命を感じる瞬間が、人生で一度だけあった。それは、喫茶店にはいると、君が待っていてくれたとき。運命というのは、可能性が一個に収束することなんだな。そこまでの僕のしようもない人生全部が、ああ正しかったんだと思えた。だって君が、目の前に待っていてくれたんだから」

女 「ええ。だからそこからはじめましょう」

男 「そう、はじめりはあの喫茶店だ」

女 「出会ってから、70年、私だって何百回も思った。あのとき別れていたら、あなたはもっと幸せだったのかなって。でも想像力がない私たちには、本当のことがすべてってことよね」

映画の音楽が聞こえる。

女 「本当に起きたことが私たちの世界のすべて！！」

## 音楽

4・1●正史へ

男と女は、出会ってから70年の過去を訂正する。

音楽に乗せて、男女と同じ赤いワンピースとチェックシャツの二人がセリフを言いながら入ってくる。

1988年5月

男1 「え、すみません、すみません」



女1 「すみませんとかじゃなくて・・・えー？ あ、だめだ許せない、いいや。帰ります」  
男1 「え！ なんて」

女1 「だってもういま聞いたんで全部」

男1 「言っていないこともあります！ フィクション香港がなんのためにあるのか、とか！」

女1 「なんのためにあるんですか？」

男1 「これがね、一種の計算装置で、いろんな運命を予測するために」

音楽アウト

男1と女1が、喫茶店のなかでかつて男女が演じた位置にいた瞬間に音楽はとまり、男1女1は、かつての男女とそっくりの芝居で、

女1 「はい言っちゃったー、これで本当に全部聞きました。じゃ、さよなら」

男1 「待ってください！ 待ってください！ 大丈夫です！！！」

女1 「なにが」

男1 「分かってても、面白いから」

女1 「なんで？」

男1 「だって僕は観てきたから！ さっき！ それでもこんなに、もう一回観たいと思ってるんです！」

女1 「私はそういうの嫌なんです！」

男1 「最初の5分だけでも観てください！ 一番最初に主人公が面接するとき、面接相手と入れ替わって、それはお互いバーチャルビジョンだから」

女1 「へえすっごく面白い。ゼーくんぶ分かりました。さよなら！」

女1、去っていく。

そこに男女、駆けつけて、男は男1に、女は女1で、Iたちがいつもコーデイネイトチェンジのときにしていたように、コマンド入力する。

※コーデイネイトチェンジ※

男1は去り、その位置になり替わるように男がたつ。

男、喫茶店で、Iの映画のなかでのセリフを叫ぶ。

男「・・・これつきりにはしねえからな！」

女1になりかわった女、不審そうに戻ってきて、

女「なによ！」

男「これ、主人公のセリフです」

女「なんで言っちゃうのー！！！」

男、女の手をとり、そのまま二人で走るさる。

音楽

1988年5月 19時

また新たな同じ格好の男2と女2が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

女2 「そういうつもりじゃなかったらだめなの！」

男2 「そうですよ、あらかじめわかってない！！心の準備が」

女2 「ふーーーん」

男2 「え？・・・あの」

## 音楽アウト

男1と女1が、ラブホテルのなかでかつて男女が演じた位置についての瞬間に音楽はとまる。

女2「じゃ」

男2「え？あの」

女2「ついてこないで」

男2「え、なんで」

女2「一人で帰るから」

男2「え、でも、だって、面白かったでしょう！映画！」

女2「映画は面白かった」

男女、駆けつけて、男女2に向かってコマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※

男女2は立ち去り、男女がなりかわる。

女「から、もう一回観に行くの！」

男「え？」

女「来る？」

男「行くに決まっていますよ！」

女は男の手をとり、そのまま二人で走りさる。

## 音楽

1988年6月

同じ格好の男女3が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

女3「じゃあ、わたしこっちだから」

男3「あ、じゃあ、はい」

女3「なに？」

男3「いや・・・あ、写真をとってもらえませんか？」

女3「写真？」

男3「はい、記念に・・・」

## 音楽アウト

男女3が位置についた瞬間に音楽はとまり、男3は写ルンですを取り出す。

女3「・・・わたし一人で映ればいいの？」

男3「あ、じゃあ一緒に・・・すみません」

ちよんどう歩いていて、通行人に声をかける。

男3「写真、とってもらってもいいですか？」

通行人、写ルンですを受け取り、撮ろうと、

通行人「はい、チーズ・・・笑顔が、かたいみたいですけど」

女3「ちよんどうがっかり、することがあって、」

通行人「あらあ」

男女が駆けつけ、コマンド入力

※コーデイネイトチェンジ※

男女3は去り、男女がなりかわる。

男「笑顔になること、言いますか？」

女「え？」

男「映画館で、ほんとはだめなんですけど、録画しちゃいました」

女「え！」

男「だから、もう家で観れます！ いまからうちきませんか！」

女「やったー！」

通行人、シャッターを切り、写ルンですを返しながら、

通行人「いい笑顔だけど、それ、だめなんですよ」

男女、手をつないで走り去る。

## 音楽

1990年5月

同じ格好の男女4が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

女4「ねえってば」

男4「うん

女4「ねえ遅れちゃうじゃない、夜景の見えるレストラン、わたし楽しみにしてたんだから！」

音楽アウト

男女4が位置についた瞬間に音楽はとまる。

男4「分かってるよ！！ もう！ いま探してるだろ！」

女4「何探してるのよ！」

男4「指輪だよ！」

女4「は？」

男4「だから、指輪！ そのレストランでプロポーズするつもりだったの！」

店員「ありました！ ありましたよほら！」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※

男女4は去り、男女がなりかわる。

女は、店員が見つけてきた指輪を凝視している。

女「・・・これ」

男「そう、紹興酒の瓶のふたから作ったんだ！」

女、深く感動して、

女「紹興酒の、瓶のふた！」

男「フルオーダーだから、高かったんだー！」

女「最高！！！」

男女、手をつないで走り去る。

店員、彼らの感動の意味が分からず、

店員「紹興酒の、瓶のふた・・・？」

## 音楽

1990年、秋

同じ格好の男女5が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

女5「無理じゃない？ あなたがちゃんと働かないと。この夢追い人！」

男5「あの」

女5「ほんとはうすうす分かってるでしょ？」

音楽アウト

男女5が位置についた瞬間に音楽はとまる。

女5「ほら、わたし一人娘だからさ。パパのことも心配だし。でも、あなたにも、夢を、あきらめてほしくない。そんなに映画が好きなのに」

女5、指輪を返す。

女5「がんばってね」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※

男女5は去り、男女がなりかわる。

男「決めた。僕、就職する」

女「え？」

男「映画研究会のみんなに言われたんだ。お前には無理だって。人をワクワクさせるような想像力がないって。認めたくなかったけど、そうなんだ。だからあきらめる。就活する」

女「でも、あなたの夢だったのに」

男「パソコンとか、通信の会社にはいるんだ」

女「それって、IBMとか？」

男「IBMとか！」

男女、手をつないで走り去る。

音楽

1991年

同じ格好の男女6が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

女6「また買えばいいじゃん」

男6「買うの俺だろ？切符をとるのも俺、手配するのも俺、予定組むのも俺、君はへらへらついてくるだけ！」

音楽アウト

男女6が位置についた瞬間に音楽はとまる。

女6「へらへらってなに？笑顔でしょ！新婚旅行は楽しいのが一番いいでしょ！ちよつとしたトラブルも思い出に」

男6「・・・離婚だ！」

女6「・・・はあ？」

男6「もう、離婚だ離婚！やってられるか！」

女6「あーそーですかー」

女6、去る。

男女が駆けつけ、コマンド入力。（女は去っていく後ろ姿に向かって）

※コーデイネイトチェンジ※

男女6は去り、男女がなりかわる。

女、戻ってくる。

女「ねえ！ねえ！」

男「なに、あ。パスポート返せよ」

女「違う違う違う」

男「なに」

女「そこ、映画館」

男「フィクショナル香港IBM・・・？」

二人、顔を見合わせる。

男「え、広東語でやってんの」

女「うんたぶん！」

男「行こう！」

男女、手をつないで走り去る。

## 音楽

1997年

同じ格好の男女7が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

男7「僕これから忙しいんだよ、2000年問題で」

女7「うーん」

男7「それこそ君のことかさ」

女7「やだよ自分の勤めてる病院になんて」

男7「近いじゃんだって」

女7「嫌だって」

## 音楽アウト

男女7が位置についていた瞬間に音楽はとまる。

男7「そもそも君のお父さんが電話してきたんだぜ」

女7「・・・二人だけでも楽しいです、くらい言ってくれたらよかったのに」

男7「え？」

女、一度奥にいったって、旅行用の大きなカバンを抱えてくる。

女7「実家に、帰らせていただきます」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデインイトチェンジ※

男女7は去り、男女がなりかわる。

男「待って！ いまビデオ持ったでしょ」

女「・・・」

旅行用の鞆のポケットに、VHSがささっている。

男「フィクショナル香港IBMの！」

女「いいでしょそれくらい」

男「よくないよ！ おいてけよ！」

女「忙しいんですよ！」

男「それは見るんだよ！」

女「やだ！ 持ってくるから！」

男「やめろよ勝手なこと！」

男女、VHSを引っ張りっこする。

女「・・・」

男「・・・一回、観とく？」

女、ほんの少しだけ逡巡するが、うなづく。

## 音楽

2003年

同じ格好の男女8が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

男8「同僚が、お前も作ってみろって。すごいだろ、もちろんまだちやちやけど、こんな風に、自作できるなんて、まるで未来みたいだ」

## 音楽アウト

男女8が位置について瞬間に音楽はとまる。

女8「これ私たちだよね？」

男8「あ、うん」

女8「きもちわるい、無理無理無理」

男8「は？」

女8「なんでどのルート行っても私たち別れるの」

男8「・・・」

女8「そんなに後悔してるなら、もっと早く言ってくればよかったじゃない！」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデインイトチェンジ※

男女8は去り、男女がなりかわる。

男「後悔はしてる」

女「は？」

男「でも、この後悔っていうのは、僕みたいな人間に唯一許された想像力なんじゃないかって思ってる」

女「ん？」

男「会社辞める。同僚が新しく作るベンチャー企業に誘ってくれて」

女「なんの会社？」

男「メタバース」

## 音楽

2004年冬

同じ格好の男女9が音楽のなかセリフを言いながらやってくる。

男9「しまってるんだよ」

女9「なんで」

男9「なんでって」

## 音楽アウト

男女9が位置について瞬間に音楽はとまる。

女9「なんでしまうの」

男9「もういつかい、来てくれたときのために」

女9、段ボールを持ち上げ、ひっくり返す。中身が散乱する。

男9「やめろよ、君ばかり、悲しいわけじゃないだろ。」

女9「そもそもなんでこんなに買ったのよ、こんな準備したって仕方ないのに。いやがらせみたい、こんなの！　こんなの！」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※

男女9は去り、男女がなりかわる。

男、テレビをつける。

テレビから、あの映画音楽が聞こえる。

## 音楽

ここまで、このシーンで時代のブリッジのように流れては止まっていたこの音楽だが、これ以降は流れ続ける。

女「なんでビデオつけたの」

男「泣くかと思って、僕が。近所に聞こえたら嫌だから」

音量をあげる。

女「だからってもつと迷惑・・・」

女も、男の傍らに。

女「もつと音量あげて」

男、もつと音量をあげる。

二人は高まる音楽のなかで、抱き合って、声をあげて泣く。

ひとしきり泣いている中で、女、ふとテレビ画面を指し、

女「あ。最初の、コーデイナイトチェンジのとき」

男もそれを見る。

暗転

2011年

男10、懐中電灯を持ってくる。

男10「計画停電、実際ぜんぜんやってないらしいよ、なんでうちの地域だけ、はあ・・・」

女10「こんな、たいへんなときに。私たち自分のことばかり」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイナイトチェンジ※

男女10は去り、男女がなりかわる。

男「・・・テレビもつかないし、ネットもできないし、まるで時代劇だな」

女「失礼な・・・こんなに感触があるの、すごいんだよ」

男「物理演算っていうの」

女「触れる」

男「つかめる」

女「撫でれる」

男「・・・なんだっけ」

女「抱き合える、でしょ」

男「あーそれ」

女「何回見たと思ってるの」

2020年

女11、マスクをとって、

女11「もう病院やめる」

男11「は？」

女11「みんな、いま家にいるのに、なんで私だけ」

男11「急に、そんなこと」

女11「いいよだが困っても。どうせ自分のことしか考えられないんだから」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※

男女11は去り、男女がなりかわる。

男「やめてどうすんの」

女「勉強する。それで、大学、医学部はいりたい」

男「え、いくつだと思ってるの」

女「こんな年だから、こんなときだから、思ったの、私、長生きしたい」

男「いつくらいまで？」

女「2088年まで！」

2024年

男12「それこそ現実に生きる人々をワクワクさせるような、そういうアイデアを僕はだせなかった。想像力がないんだ」

女12「なんか、なんにもなくなっちゃったね。私たち」

男12「もう、生きてる意味がないな」

女12「なんだか、もうこの世に未練がないみたい」

男女が駆けつけ、コマンド入力

※コーデイネイトチェンジ※

男女12は去り、男女がなりかわる。

男「別の世界にいかがか」

女「え？」

男「自分たちだけの仮想空間、作ってみないか。幸い、退職金もあるし。まだ60前だ、こつからだろ」

2034年

女13「それで？ましな未来って何？」

男13「そこなんだ、別れていたとして、それから君がどうしたのか、皆目わからない。僕には想像力がない」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデイネイトチェンジ※

男女13は去り、男女がなりかわる。

男「僕は君に、もつといい人生を、仮想空間で体験してほしかったんだ」

女「ありがと。たかさんのお別れがみられてちよつと楽しかった」

女、へらへらと軽く見渡す。

男「思いつかないんだ。僕と別れたあとの君の人生、どんな場所が必要だ？どんな人物が必要なんだ？それがわからないとつくりようが・・・」

男、つまづく。足を気にしている。

女「大丈夫？」



男「ああ、ちょっと足があわないみたいだ」  
女「替えちゃいましょうよ、新しいのに」  
男「まるでサイボーグだ」  
女「面白い時代になったものね」

2046年

男14「僕たちは、フィクションナル香港IBMという映画の、いったいなにが面白かったんだろう」

女14「わからない」

男女が駆けつけ、コマンド入力。

※コーデインイトチェンジ※

男女14は去り、男女がなりかわる。

男「いったい何回みたんだ、本当のオタクだよまったく」

女「ねえ、私たちの仮想空間のなかでも、観ましょうよ」

男「こんなに観たのに!？」

女「ずっと思ってたの。私たちの人生、そのまんま仮想空間にできないかしら」

男「そのまんま？」

このあたりで、自然に音楽は終わる。

男女と同じ格好の、赤いワンピースが7人、チェックシャツが7人、パネルの向こうにいて、その姿が透けて見える。

それはまるで、人生の、あったかもしれない可能性そのもののように、男女を見守っている。

ゆっくりと、一人ひとり立ち去っていく。

女「こんなこといいな、なんて仮想空間、子供じみてるのよ」

男「でも、まったくおんなじことをもう一回やれって言われてもさ」

女「記憶をフレッシュするの」

男「なんだって？」

女「私たち、いままでのことをすべて忘れましょうよ。それでなにもかも忘れて、もう一回、人生をやり直すの」

男「フレッシュ、できるのかい」

女「今はできないわ、けどあと10年もあれば!」

男「なるほど、じゃあ知ってる場所だけ作ればいいんだな、僕たちのほうが忘れればいいんだ、その手があったか!」

女「ええ! なにもかも忘れて!」

男「僕たちの、人生の中で、もう一度映画をみるんだ」

女「やっぱり人生があるから映画が面白いのよ」

男女も立ち去る。

入れ替わるように、IとUが登場。

4・2〇IとU (映画)

仮想空間。夜。九龍にて。

Iが手帳を読んでいる。

一冊ずつ、ざっと目を通したら、その場に捨てていく。

U 「あれが香港島。いまのフィクション香港の街全体」

I 「燃えてるな、昼間みたいだ」

U 「電子人形たちが暴走してる、もうだれにもとめられない」

I 「へえ……」

海の音は聞こえず、電子音が低く遠く聞こえる。

U 「この街は、このまま壊れていって、なにもない空間だけが残る」

I 「ま、俺にとっては思い入れのない街さ」

U 「どうしよう……失敗しちゃった。うちのクライアントも、もうこんな場所ほいらな  
いって」

I 「二人きりになるには、ちょうどいいさ」

U 「でも……これからどうする……？」

I 「君は？」

U 「……もうちよつとここにしようかな」

I 「そうか」

このあたりで、Iはもうすべての手帳をその場に捨てていて、あたりに手帳  
が散らばっている。

U 「これ」

U、小さなマントウのかけらを差し出す。

I 「これがマントウか？ こんな小さいのか」

U 「もうそれしかのこってないの。あげる」

I 「でも」

U 「IBM社員もいなくなって、ここから出るにはそれしかないから。せいぜいひとりぶ  
んどけど、余ってたよかった」

I 「君はどうするんだ」

U 「私は……でられないの」

I 「どうして」

U 「私も、電子人形なの」

I 「なんだって」

U 「外の世界にはいけない。香港と一緒に、滅びるわ」

I、マントウのかけらを口にふくむ。

Uを引き寄せ、キスする。

U 「！」

Uが抵抗をはじめたことで、Iが、マントウを口移ししていることが分かる。

Uは飲み込んでしまったようだ。

キスが終わると、I、はげしくむせる。

U 「どうして？」

I 「君が嘘をつくからだ。僕だけを、ここから逃がそうとしたな」

U 「だって、一人分しかないのよ、どうするの？ あなたここにとりのこされて」

I、口に残った味を嫌がっている。

I 「初めてのキスの味がこんなので残念だ」

U 「はじめて……？」

I 「電子人形なのは俺だ。そんな気はしてた。俺がいままで書いたはずの小説、ひとつも思い出せないんだ」

U 「・・・Iが？」

I 「君が電子人形なわけがない。そんなに、瞳に未来を宿している君が」

U、Iに抱きつく。

その場に流れている電子音は、だんだん低い、音楽のようになっていく。

U 「私、あなたのことが」

I 「もう行きな」

U 「I、I、わたしはどうしたらいい、なにか、あなたにしてあげられることがある？」

I 「じゃあ、最後まで、君を見ていてもいいかい？」

Iは、Uをいとおしそうに見つめる。

Uも見つめ返す。

Iはゆっくりと手をUの口元にもっていき、ぴったりと口をふさぐ。

## 音楽

それは、最初のシーンで、女が男の口をふさいでいたのと、まったく同じ構図である。

Uは徐々に苦しそうになっていき、身もだえするが、Iがしっかりと支えている。

Iは窒息をもって、彼女を帰そうとしているのであった。

Uが完全に意識を失って、Iの手によって地に寝かされるまでの間に、男女が背後に次々に出てくる。

女たちは上手から、男たちは下手から登場し、それぞれ左記のシーンを演じて、手をつないではけていく。

大音量の音楽のなかで、しかも互いにセリフのタイミングが重なりあっているので何を言っているのかはほとんど分からないが、その様子は、走馬灯のようでもある。

男1 「・・・これつきりにはしねえからな！」

女1 「なによ！」

男1 「これ、主人公のセリフです」

女1 「なんで言っちゃうの——！」

女2 「映画は面白かったから、もう一回観に行くの！」

男2 「え？」

女2 「来る？」

男2 「行くに決まっていますよ！」

男3 「笑顔になること、言いましょうか？」

女3 「え？」

男3 「映画館で、ほんとにだめなんですけど、録画しちゃいました」

女3 「え！」

男3 「だから、もう家で観れます！ いまからうちきませんか！」

女3 「やったー！」

女4 「・・・これ」

男4 「そう、紹興酒の瓶のふたから作ったんだ！」

女4 「紹興酒の、瓶のふた！」

男4 「フルオーダーだから、高かったんだー！」

女4 「最高！」

女5 「それって、IBMとか？」

男5 「IBMとか！」

女5 「すごい！」

女6 「ねえ！ねえ！」

男6 「なに、あ、パスポート返せよ」

女6 「違う違う違う」

男6 「なに」

女6 「そこ、映画館」

男6 「フィクショナル香港IBM・・・？」

二人、顔を見合わせる。

男6 「え、広東語でやってんの」

女6 「うんたぶん！」

男6 「行こう！」

女6 「行こう！」

男7 「待って！いまビデオ持ったでしょ」

女7 「・・・」

男7 「フィクショナル香港IBMの！」

女7 「いいでしょそれくらい」

男7 「よくないよおいてけよ」

女7 「忙しいんですよ」

男7 「それは見るんだよ」

女7 「やだ！持ってくから！」

男7 「やめろよ勝手なこと！」

女7 「・・・」

男7 「・・・一回、観とく？」

女7、うなづく。

男8 「会社辞める。同僚が新しく作るベンチャー企業に誘ってくれて」

女8 「なんの会社？」

男8 「メタバース」

女9 「・・・もっと音量あげて」

二人、泣く。

女9 「あ。最初の、コーデイネイトチェンジのところ」

男10、懐中電灯を持ってくる。

男10 「・・・なんだっけ」

女10 「抱き合える、でしょ」

男10 「あーそれ」

女10 「何回見たと思ってんの」

女11 「こんな年だから、こんなときだから、思ったの、私、長生きしたい」

男11 「いつくらいまで？」

女11 「2088年まで！」

男12 「別の世界にいかうか」

女12 「え？」

男12 「自分たちだけの仮想空間、作ってみないか。幸い、退職金もあるし。まだ60前だ、こつからだろ」

男13 「ああ、ちよつと足があわないみたいだ」

女13 「替えちゃいましょうよ、新しいのに」

男13 「まるでサイボーグだ」

女13 「面白い時代になったものね」

女14 「やっぱり人生があるから映画が面白いのよ」

### 音楽終わり

大量に出てきた男女たちはいなくなり、

Uが窒息してしまったあとは、IもUもエンドロールのように観客に軽くポーズを決めて立ち去り、

ちよつと音楽が終わるタイミングでは、舞台上は空っぽである。

4・3 ●どこか。自宅かもしれない(2058年)

男女が、軽やかに、若々しく登場。

女「出会ってから、70年、私だって何百回も思った。あるとき別れていたら、あなたはもっと幸せだったのかなって。でも想像力がない私たちには、本当のことがすべてこよね。本当に起きたことが私たちの世界のすべて」

男「ああ、よくがんばったもんだ、もう本当に体が動かないよ」

女「肉体はもうここまでね」

男「もう90だもんな」

男「ここが一番難しいところなんだろう？」

女「理論上は大丈夫。うん、絶対大丈夫。いよいよ脳みそだけになるわよ。それでも、2088年までは、ぎりぎりだけ」

男「本当に小さくなるんだろう？」

女「ええ、知覚として最低限の部分だけ残すの。このコーヒーカップ一杯分くらいの、どろどろの液状になる」

女、なんとなくテーブルの上のコーヒーカップを示す。

男「僕たちが？」

女「そうよ。世界でも、まだ数例しかやったことないのよ」

男「・・・みーちゃんたらぐちゃんの、お骨よりもちっちゃいやないか」

それはもう悲しいことではないようで、二人は懐かしそうに笑う。

男「悲しいお知らせなんだが」

女「なあに」

男「僕たちの人生の仮想空間は、3年分しか作れなかった」

女「3年分!？」

男「全部が全部覚えてるわけじゃないからなあ、とびとびに、凝縮して、走馬灯みたいなもんで」

女「でも、2088年まであと30年、私たちの脳は生きてるのよ」

男「コーヒークップのなかのどろどろになってね・・・」

女「んん3年分だったら、繰り返しちゃいましょうか、10回分」

男「そうか! せっかくフレッシュできるんだから」

女「ええ! 毎回繰り返しには感じないわ、覚えてないんだもの!」

男「やっぱり、記憶を消してもう一回ってのは、僕たちオタクの夢だからね」

二人、楽しそうである。

男「仮想空間で目を覚ましたら、21歳の僕と、23歳の君だ」

女「はじめてのデート!」

男、急にほんの少し不安になって。

男「もう一度、記憶を失って出会っても、また僕を選んでくれるかい?」

女はこともなげに、

女「もちろん、だって、今までのこと覚えてないんだから、そうなるに決まってるじゃない、いくわよ!」

男女「せーの」

二人は見えないシャツターに手をかけ、それを降ろす。

音楽※※フレッシュ※※

あの不安定な音色。

男女は一度倒れ、人形のように移動。

#### 4・4 ●喫茶店

1・1のシーンとまったく同様の光景。

真ん中のテーブルに向かい、女が座って待っている。

女の前にコーヒークップがひとつ。

喫茶店にはいったときの、あのベルの音。

男、女を見て、声をかける。

男「あの」

女もすぐに気が付いて、

女「ああ」

男「本当に来てくれたんですね」

女「え、だって、約束したじゃないですか」

男「そうですね、そうですけど、本当に来てくれるなんて、実はすっぱかされるんじゃないかと思っただけ、いや、もう絶対にすっぱかされるような気がして、だから、まさか来てくれるなんて・・・本当に・・・感動です」

女「変な人ですね」

女、笑う。男もあわせて笑ってみる。

女に手でさりげなく促されて、男も女の向かいに座る。

女「とりあえず、なにか飲みますか？」

男「あ、ああ。なに飲まれてるんですか？」

女「コーヒード」

男「あ、じゃあ、すみません（店員に話しかける体で）同じものを」

短い沈黙。

男「あの、面白いですよ、映画」

女「そうですね、私よく知らなくて」

男「『フィクショナル香港IBM』、すごい映画です」

女「へえ」

男「SFなんですけど、時代設定はいまから100年後、2088年で、フィクショナル香港っていうのは、仮想空間に再現された香港の街で、主人公はそこでルポを書くことになって」

緊張していた男だが、映画の説明によりどんどん饒舌になっている。

女「詳しいですね。好きなんですか？」

男「好きになりました！ さっき観てきたんです」

女「さっき？」

男「はい、朝一番に」

女「え、だって、これから観に行くのに」

男「はい、これから観るのに、もしつまらなかったら大変だと思って、下見に」

女、やや呆れて笑いながら、

女「なんですか、それ。でも面白かったんですね。楽しみです」

男、すっかり前のめりになって、

男「それでね、それでね、主人公はそのフィクショナル香港で一目ぼれをするんですけど」

女「あ、ラブストーリーなんだ」

男「そのヒロインはスパイだって中盤でわかるんですけど」

女「へえ」

男「フィクショナル香港は何度もリセットされて、主人公は毎回記憶を失うんですけど、ヒロインとは何度でもあって、で結局そのヒロインは電子人形っていう人工物だった、見せかけて、実は電子人形なのは主人公のほうだったんです！」

女「え、それで？」

男「それで終わりです。ラストは泣きました！」

女「・・・それで？」

沈黙。

男「映画館を飛び出して、走ってここに来ました。そしたらあなたがいて」

女「いまから一緒に映画をみにいく・・・」

男「・・・」

女「それで？」

女、おそろおそろ、続きを言う。

自分で言うごとに、その記憶がはっきりしてくるようだ。

女「映画館を出て、目的もなく走っちゃって、ラブホテルには行って、あなたはそうとは知らずにびっくりして、結局もう一度映画をみて。あなたはプロポーズして。指輪は紹興酒の、瓶のふたで、私たちは結婚して、新婚旅行は・・・香港」

男「・・・覚えてたね」

女、わっと泣き出す。

女「どうしよう！ もう取り返しがつかない！」

男「しようがないよ、難しいんだろ？」

女「だって・・・もうわたしたちただの、二個のコーヒーカップよ？ もうどうすることもできないわ、しかもこれあと10回も繰り返すのよー！ー！」

女、さめざめと泣く。

ところで、ここで彼らが繰り返すのが10回であるのは、初演においてのステージ数が10だからである。

女、ひとしきり泣いた後、

女「ごめんなさい・・・」

男はおだやかな態度で、

男「僕が気にすると思うかい？」

女「・・・え？」

男「だって、僕はネタバレ、気にしないじゃない」

女「・・・」

男「君だよ君。愛ちゃんには、できれば記憶を消してもういっかい、させてあげたかったけど」

愛「優くん」

優「でも結局この喫茶店で、僕がぜんぶしゃべっちゃうんだしね。同じかな」

愛「優くん、いいの？」

優「僕はいってば。全部見たけど、全部もう一回見たいと思ってるよ」

愛「もう、10回よ」

優「10回でも余裕！ 観てきた僕が言うんだから間違いない！」

愛「・・・」

優「行こうか」

愛「どこへ」

優「映画館だよ、そのあとはラブホテル、雨のなかの道、香港、僕たちの家、ぜんぶ知ってる場所だけど」

愛「それで？」

優「それで、同じことをもう一回、さらにもう一回、そしてもう一回」

愛「それで？」

優「それで・・・ラストは泣きました！」



二人は手を取り合って喫茶店をでていく。  
暗転

**電子音声 「フィクショナル香港 I B M」 15秒ほど音楽。**

照明がつくと、客席も開演前と同じように明るくなっている。  
テーブルのうえのコーヒーカーップが2つになっている。  
そのことをもって、この作品は終わりである。